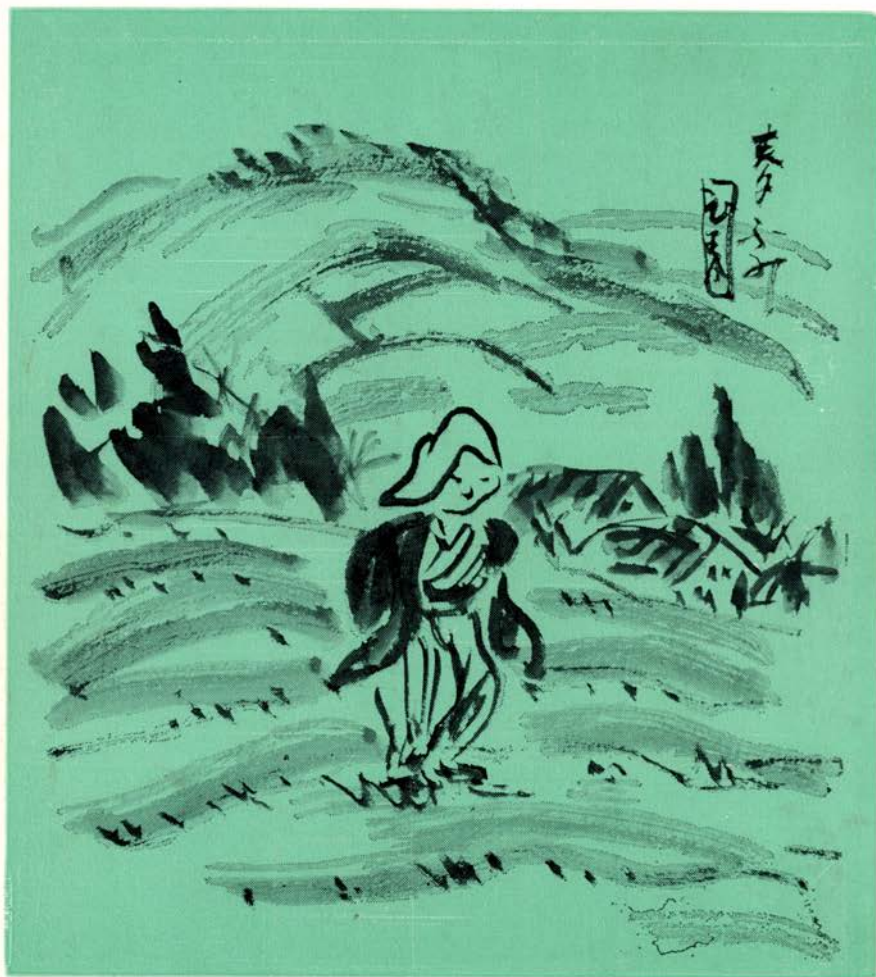


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十五年一月二十五日 印刷
昭和四十五年一月一日発行 (毎月一日発行)
(第五十三号)



No. 53

二月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円

酒 清
日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬策** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

「一病息災」

「たどりつきふりかえりみれば山川を越えては越えてきつるものかな」河上肇博士のこの歌が歳と共に実感として迫る。と同時にこれからの余生を一日でも長く健康で楽しくと冀う心は誰しもである。老化を防ぐには、寿命を伸ばすには、スタミナを失わぬためにはと、この複雑できびしい現実の生活に對し人知れず心を使っている人が多い。

医学の進歩も科学的裏付けをしてしきりに呼びかけている。が案外道は近きにあるかも知れぬ。緒方博士は出来るだけ多量の唾液を

分泌させそれを全部呑み込めと言われるし、貝原益軒は「唾液はおしみて吐くべからず」と論じている。あつと驚く時出る生ツバキでも必ずぐつと呑み込むべきだ。脳の細胞は200億とか言われているが決して再生はせぬから記憶が薄らいだり物忘れしたりするのは当たり前である。つまらぬ事は忘れて終ってこたわらぬ事だ。「一病息災」という言葉がある。寧ろ自分の弱点を生かして対処するのが長寿の法であるらしい。

団結の名で親と子と妻もてあまし

内幕を内助の功が押しかくし

道草にしては湯の街派手に酔い

はったりがそれから芽が出て実を結び

冗談をまにうけ菓子折さげて来る

前号訂正 おだてられながらも若さ崩すまじ

中島生々庵

川柳塔二月号

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

一病息災―句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

人工甘味……………西尾 栞…(2)

川柳初篇研究……………(八十)……………(22)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄
川端 柳風・故高須亜三味・丸 十府・岡田 甫

川柳日記……………麻生 葭乃…(21)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………川村 好郎…(26)
……………(近作柳樽)……………西尾 栞…(27)

句碑せんさく……………(大陸巷談)……………東野 大八…(24)

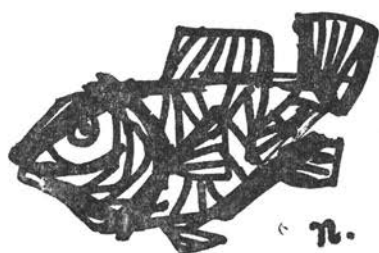
川柳徳川記……………(十一)……………富士野 鞍馬…(33)

指先……………高鷺 亜鈍…(27)

人口甘味

西尾 栞

只今、チクロという人工甘味のこと、新聞紙上を賑わしている。製菓会社である弊社へも、問い合わせがやってくる。そこで弊社全商品には絶対チクロが混入されておりません。〇〇製菓株式会社



私の好きなもの 5……(同人特集)……………(28)

清水白柳・正本水客・戸田古方

近作柳樽……………菊沢小松園選……………(34)

ああ弓彦君……………川村好郎……………(43)

再發で悪化……………礪満子……………(43)

初步教室……………本田恵二郎……………(50)

大萬川柳「脈」……………清水白柳選……………(52)

☆柳界展望……………(薫風)……………(54)

☆本社新春句会……………(庸佑)……………(56)

☆各地柳壇……………(文秋)……………(60)

「独身」……………村上春巳選……………(48)

一路集「梅」……………中島小石選……………(48)

「タレント」……………長野文庫選……………(49)

★編集後記……………(三夫)……………(65)



印という刷物を発行した。するとある取引先から、こんな自己発行のものでは駄目だ。衛生試験所の分析表を添付せよというて来た。社員の一人曰く「不純物の混入していない製品を別製して、それを試験所へ持って行って最良の分析表を作った場合にどうなるのか、自分が混っていないという程確実なことはないのだが」という疑問が出た。川柳にはチクロが入っているが、サルチル酸が入っているが、一向に人体に影響はないが某大柳誌の同人雑詠欄に、古川柳そのまま載っていたのには頭にくたようだ。気をつけてこそ、気をつけてこそ。



中島生々庵選

高槻市 若柳潮花

三切れたままで宴会弾き終り

次つぎに嫁って淋しいことはじめ

足拍子くらしをかけた音がする

埋れ火のように閉うて燃えぬ恋

のど巻いて風邪の見舞へ顔を出し

京都府 大鶴喜由

人工で育てりや乳房は飾りもの

春のなかに花咲く春が別にある

性感帯の武装を女忘れてた

上位下位二人がそれでいいのなら

過去を隠し合うて一対出来上り

青森市 工藤甲吉

人の世を忌み白い雪白く降る

一年のあわれを思ふ枯野原

家中をひとまわりして風邪は逃げ

ハネムーンを見送りバーで飲み直し

プリンスメロン二つ揃えてミニすわり

正確な時計にあわてた急ぎ足 出雲市 尼緑之助

田甫に墓あり晩鐘もなく暮れる

兼業農白いい白い頬冠り

夏も秋も神話の川は砂ばかり

忙しい忙しいとて忘年会

素人の庭師剪るには惜しい枝

東大阪市 竹中肖二

アリバイを被疑者はやっと思ひ出し

海苔茶漬こんなところに美味い店

こんなにも伸びて息子の頼りなさ
真夜中のうごめく音がする都会

大阪市 金井文秋

口紅の濃さが有毒色素めく

大役を困るこまると受けてくれ

明暗の暗ではそばそ小商売

短所を突けば僕の短所にもひびき

スリだとはあとで気付いたハプニング

倉敷市 水粉千翁

素顔とは耐えた涙の通るところ

早う来たつもりあなた見失い

網棚の土産もゆれて里心

好き嫌いなく大それたつまみ食い

一と山に捌いて柿の秋深む

高槻市 傍島静馬

云い過ぎた只一と言が眠らせず

退職金底ついてきた年の暮

ひとのことかもうておれぬ十二月

寝正月きめ込んでても金が要り

去年どおり包んで年玉気がひける

大阪市 正本水客

波が消してくれる足跡だから歩く

歳という日記の重さ感じる日
粉な雪のひとつこ ためらい見せて降る
気のあわぬどうし人生へ吹き溜り
石段の落葉に冬が動かない

堺市 吉田圭井堂

不渡りも先祖の墓地は見逃がされ

預けてさえおれば銀行お気に召し

筒抜けに気づいた時は遅かった

安うりはせぬが長女は厄近し

いきり立つ弥次を押えたあのうまさ

大阪市 山川阿茶

襖絵のすそに可憐な饅頭菊

花屋の菊にも菊それぞれの個性

鉢巻も絶叫もない医者者のスト

盛り場近く住み

真夜中に何がお国を何百里

たすけ合い年末だけの仏性か

大阪市 大坂形水

京阪で顔見世行きと乗り合わせ

車待つ列に忍耐試めされる

白タクに終電洩れを見透かされ

引かされた株だけ残り年終る

妻は褒め子供はけなす初詣い

大阪市 木村水洞

街中をマイクで流す空手形

議員バッジつける日までの低姿勢

衣食住たりて人生味気なく

ややくそも混って長屋餅を搗き

大阪市立博物館

年の瀬に行列させる月の石

豊中市 戸田古方

エスカレーター走る男に邪魔がられ

異論はあるが組織につめよられ

コマーシャルという暴力が追いつめる

目測の脚の太さのおもしろし

見えるもの何でも本当かと思ひ

出雲市 原 独仙

老骨に鞭打つどころかりウマチス

楽隠居に非ず中風の抱く炬燵

酔うほどに無礼講よとからみつき

愚につかぬ事にも神経突る老い

茶柱を信じて来たがこの不首尾

岡山県 浜田久米雄

ラーメンですませすこうし物足りず

ことしこそみんなと合わすことに決め

もう過去へしがみつかないことにきめ

またひがむ愚痴とは知っていて怒鳴り

湯どうふの湯気へ二月の灯が暗し

倉敷市 本田恵二朗

孫用の笑顔を妻に見つけられ

人生グランド余力たつぷり六十二周

なんとなく庭下駄履いていた思索

なつかしい丘がそのまま生きていた

命から二番目でしようと茶器を褒め

大阪市 本多柳志

いい土産置いて死にたい欲があり

我が道を行けば野草の花でよし

見送って戻って決意又変り

石段の途中で鐘に追いぬかれ

罪をにくんで人は執行猶予され

明石市 阿万万的

西播瓜生石仏から三濃山へ

秋にとける姿で不詳の石仏

屋根くずれた離村の跡にも秋の花

秋の片隅間借りのように人が住み

山陰湯村温泉から応挙寺へ(二句)

雨もまたよいもの宿の傘で出る
わたしひとり待つ方丈に湯がたぎり

宇部市 平 田 実 男

あやしきは夫この頃やさし過ぎ

万引きをスーバーけしかけるように混み

穴うめるだけのボーナスでも嬉れし

壁を塗るかえて襖がすすけて来

三億円噂の中をよく泳ぎ

大阪市 不二田 一三夫

梅志氏一月二日大手前病院へ入院（二句）

何よりの見舞い句集の出来る日より

乳牛のふみにじられる母性愛

金持ちの靴音知らぬ歩道橋

寄席（二句）

反骨の舞台を地方へ押しこめる

ダラダラと客を寝かせて舞台おり

高槻市 福田 丁 路

のんだくれ絡んで泣いて寝て仕舞い

吃逆を一つはかなく息が絶え

文句があるなら来いとは女なり

成功のものと失敗繰返し

岡山県 横 山 一 声

十二月間違い電話に腹をたて
集金屋ボーナスの出る日知って居た

遠慮しいしい一升あけて行き

銀婚の旅のプランは子にまかせ

姫路市 村 上 春 巳

いつの間にかインスタントに飼育され

友情を賀正の二字でつないどき

角の無い鹿のわびしい日向ぼこ

ささやきの小路北風感じない

島根県 堀 江 正 朗

見えぬから冬の厳しさだけ残り

室中をさぐり廻った物忘れ

手さぐりが酔うているから面白い

夢楽しあ顔この顔見えている

下関市 国 弘 半 休 門

基地の駅基地の女のグリーン券

仕返しの際があやしく美しい

旅に飽き五右衛門風呂の良さにいる

金はなく共大根をさげて礼

出雲市 弘 津 柳 慶

みそ汁よお前はチクロに染むまいぞ

ギッチョが握手へ一寸とあわてたり

二年目の病床の妻へ医者をかえ
秋の雲煙突が動いてる

小松市 馬場魚山

回診の度足を揚げ指を曲げ
教材に貴重な病だナと気付き
大正にそだち左を歩くくせ
特売場正札だけを見て歩き

松江市 中川晃男

人の口気にせぬ相傘露地を出る
またうづく心の傷が酔わさせず
話合ふ余地なし師弟・父子・労使
出初式の留守に延焼して了解

竹原市 山内静水

列車遅延の番線へ走らされ
ひざ枕めつきりうすうなった髪
一次会半ばで寝てる果報者
やっと来た芸者したたか酔つており

美禰市 安平次弘道

子に愛が移ったすきをつく浮気
旅の恥知れて世間の狭さ知る
出るところで勝てる自信が受けて立ち
言訳の長さみじめささらけ出し

大阪市 天正千梢

うっとりとする愛があり無一文
幸うすく生れしなどと言うなかれ
少こうし金あつて銀行へ日参し
五十年の起伏向い合つても無言

守口市 羽原静歩

家中が笑いとけてうどんスキ
凡人の昨日も今日も虹を持ち
うれしい日餅を配つて気がつかれ
横顔がこうもきれいに苦勞する

大阪市 中川滋雀

もの足らぬ顔してボヤを見舞れる
或る時は阿呆になつて従いてゆき
消しゴムの働ききつた身の丸さ
ストープを背に叱られるあたたかさ

奈良県 草深醉升

吊皮にさがれば下で脚を組み
駆込んで席取り損つた間の悪さ
万博に皆来てくれと佗び住居
大国になつたなつたと曲り角

竹原市 時広一路

自他共に許して苦しいときもあり

一泊の温泉効能には触れず

心ふと金に麻痺したように揺れ

寒菊へ落葉の未練まといつく

竹原市 小島 蘭 幸

まだ好きなうちに別れることにする

別れても逢えば挨拶して欲しく

さようならもう言うことがない別れ

ふと我に戻ると恋は終ってた

高石市 谷 沢 好 祐

一劃が消えたネオンの不具者めく

あなた好みになる気だろうか角隠し

脊水の陣もう浪人を許されず

我が青春に悔がおまして戦中派

鳥取県 森 田 布 堂

上げ底の土産賣うて気がめいり

新製品出廻る頃に月賦済み

良薬の味カプセルにさえぎられ

脱毛を苦にしだんだん禿げあがり

大阪市 太 田 良 子

へそくりが此処にもあった衣がえ

幸わせそうな顔々だけが級会

日曜日間違い電話に起される

受験生がいて夜昼がいれ変り

岸和田市 内 藤 き さ 子

芸達者から悪酔いに変りかけ

或る日ふとルンペンの強さうらやまし

二次会の二次会という露路があり

七人会二人は飲めぬまま唄い

大阪市 西 森 花 村

キューピットいずれはじじとばとなり

前議員これで人年の吹き納め

除夜の鐘払え払えと響くなり

飲めぬのが靴替えられた忘年会

藤井寺市 西 い わ を

着色をしないピンクの爪の艶

手を触れて心に通うものが出来

飛行雲子供の知恵で割切れず

判ったやら判らぬのやら領いて

大阪市 西 出 一 栄

デパートから贈って義理を済ませた気

年内の二字に人間支配され

数の子の音をおいしく召上り

顔のシミつぎつぎ鏡が見つつけ出し

名古屋市 吉 田 水 車

旅もよしもの言いたげな石仏

地球と言う家路を急ぐアポロかな

荒波にしばしあずけて冬の磯

八重子の・婦系図・お鳶に寄せて（一句）

書き置の鉛筆書きもあわれにて

姫路市 隠岐不酔

味はめて礼状だせば又届き

鏡見て自分の顔をうたがえり

隔日でよいとお医者も笑顔して

おみくじを二辺ひいたら凶と吉

鳥取市 河村日満

飲めるなら飲めと母とはちがう父

首筋の垢大げさに子を洗い

部長の「よし」を課長の意地が支払わず

今村夕路さんに

梨という生甲斐があり古稀たのし

大阪市 河井庸佑

災いのもとと知っててよくしゃべり

気前よく小づかいくれた酔うたパパ

子には子の言い分がある通知票

ひやかしてハントしたのと結ばれる

兵庫県 河原みのる

おそろしや子殺しの記事に馴れそうな

伐採夫を首斬り役のよう憎み

ハンターへほっとしました鴨がたち

南日を吊柿は確と照りかえし

岡山県 坂井三葉

儲かった日の夕焼を一人占め

冬眠のない人生へ靴をはく

この線も赤字と判かるバスの色

札束に狙われている中間派

兵庫県 遠山可住

個人的意見は穿ったことを言い

しまい風呂妻うっかりと流行歌

目玉焼なら俺もする妻の留守

ライバルの出生

三人とも女 女らほっとする

大阪市 福井野迷路

七人の敵を逃れて妻の膝

したいこと出来ず出来ることしたくない

武力不行使宣言とは舌かむような

機動隊腹では感謝手を合わせ

倉敷市 小幡里風

早合点してもつれてるいい話

花道のない宿命を進まねば

不甲斐ない多忙を楯に義理を欠き

花の頃母となる日の毛糸編む

京都市 都 倉 求 芽

道それで山茶花ひっそり白誇る

真っ青の空がまぶしい昼の酔い

凍る灯へ自分の心しまい過ぎ

年齢甲斐もなく尾を振るだけの犬となり

京都市 松 川 杜 的

善光寺にて

門跡の珠数に触れたを嬉しがり

抵抗を錆びたナイフに笑われる

先輩も所詮金には水臭し

プロデューサーの右手へ拍手のタイミング

岡山県 直 原 七 面 山

もの欲しそうな娘の目に出合い

夢で埋まる娘の日記

愚痴こぼしても春は春

寒さにめげず超ミニの娘ら

大阪市 児 島 与 呂 志

両親の不隠な空気娘らは知り

不気嫌な母の無口は無気味なり

好きだと唯一と言それが言えない

あまりにも自分に不忠実な言葉

尼崎市 高 津 徹 也

荷札よ呉々も長旅を頼むよ

土が生きているから春夏秋冬

粉雪へ少女同士の仲直り

政治家の理解しがたい仲直り

大阪市 石 倉 旅 風

わくら葉が街を師走にして走り

七五三見せてやりたい親の顔

初春の微吟でくぐる大鳥居

言訳の仕様で腹を立て直し

鳥取市 藤 本 礎 山

手遅れと聞こえて俺の闘志湧き

カラーテレビ見る気へ病軀すぐ眠り

床柱大工自信の墨をうつ

味噌汁がこんなうまい医者許可

大阪市 室 谷 鉄 舟

旅先で大学二年の姪死亡

箸箱も机も帰り待ってたに

勉強しに生れて来たよな娘だった

あの娘だけ何で帰らぬ世を恨む
泣きながら歩いているのに気付き

倉敷市 野田素身郎

玉垣に金拾円の寄附の額

仮縫へまた三キロはふえた腹

結論を言えぬ答弁に立たされる

三味線がはいり幹事は腹を決め

笠岡市 木山要次

身から出た錆に塗料を刷いてまで

柿一つ糞虫いよいよ縮みけり

看護婦を杖に甘えてみたい癒え

やがて散るもみじ錦を着て奢り

岡山県 出原敬一

写生の子冬を彩る色がない

正解は親の無い子よ参観日

先頭の杭は流れを分けて立つ

正月が次を嫁がす齡にする

高槻市 山田季賛

野仏に霜が降りている寒さ

生活がかかっているから馬鹿になり

職安で僕も年だと教えられ

女には女の考えがある妻の愚痴

奈良市 宮口笛生

廃車なるSLまたたく間にさびて

汽車ポッポのイメージSL消えて行く

山に雪残して昨夜の雨あがる

だしぬけに鹿と出くわす奈良の夜

和歌山市 垂井葵水

またひとつ年とる暦とどけられ

やわらかく払えば冬の蠅が触れ

今日会えるかも知れない傘の柄の温み

三輪車忘れられてる空ッ風

西宮市 若林草右

足らぬ血が唇を塗り頬を塗り

人工着色ここにもあった三面鏡

泳がせてすくう豆腐にある年輪

押売りへ隣の犬が吠えてくれ

倉吉市 奥谷弘朗

又聞きのニュースへ新聞読みなおし

幸運を棚ばた式に考える

妻の云う野心男で終りそう

奥さんにライバルがいて派手になり

竹原市 森井善居

冬草の性を不死身と想う日よ

サボテンの過信は冬を自滅する

十二月某日鉢植ゆえに枯れ

薔薇褪せてロマンチストの過去が無い

愛媛県 村上旭童

一人飲む酒にテレビと向いあい

その上に選挙の車まではしり

たちのいて見れば小さな家だった

湯たんばがいのち老人小さくねる

枚方市 宮川珠笑

作業着を重ね夜業へ武装する

内職の妻に稼ぎを打診する

もう飲めぬ下戸にもつたいたくも酌ぎ

夢に見る亡父はおんなじ服でいる

大阪市 神谷凡九郎

弥次喜多の喜びを今の世に探す

子に残す遺産父の残した人生史

人間らしゅう生きる人間がそうさせず

無気力の証のように夢を追う

米子市 八木千代

あたたかい窓を少年見て通り

予感だけくれて幸運通りすぎ

幸運の不意へぶざまなほどあわて

茶を替えてさっきの小さな不和を恥じ

岡山県 浜野奇童

悪童の机が空いた淋しい日

せめてもの孝行進学あきらめる

二三人喋ればそれですむ会議

父と子を労使にわけてスト続く

堺市 新谷笑痴

ホステスのえくぼにメニユー気が変わり

頭上では師走が駆ける地下工事

アリバイへ一億ほつとしたニュース

溝板を鳴らし大物来る選挙

東大阪市 竹中綾女

安保賛成のデモに参加

静かなデモ警官守るように付き

沖縄を返せ見る人デモる人

デモ参加いつか難波へ来てしまひ

起こされた候補へ投票せぬと決め

八尾市 高杉鬼遊

政見は頭のさがる人ばかり

この薄き給料袋に支えられ

七人の敵がボーマナス待ち伏せる

神に手を合すに恵方とは何だ

熊本県 有働芳仙

握らせるこつを子供に覚えさせ
舶来の香水画廊ですれ違い

別れよかと思つてゐるうちパパになり

定食のような顔ぶれ選挙戦

笠岡市 木山遠二

まめなのを有難がれと慰める

机上多忙前金切の雑誌が来

隅から隅読めば新聞安いもの

落葉焚くのへ縁側で茶がはいり

松江市 小林孤呂二

山茶花のいのち雪ふる朝に散り

茶の花が好きで供える母の命日（ひ）に

雪ふる夜雪の話で子を寝かす

行き帰りこのシグナルに身をたくし

大阪市 宮尾あいき

四季咲のバラの運命よ寒に咲く

借金締めくくりする金を借り

子沢山阿呆になつて世を渡り

ライバルが倒れこちらも気がゆるみ

堺市 高橋千万子

心では許し言葉が見つからず

立のきをごねてる店の砂ほこり

出しゃばりが来て出しゃばりを笑つて

忘れよと言ふ一言がむずかしい

和歌山市 野村太茂津

予想した通りになつてふと淋し

大陸の亡友よ皇居はもう春だ

国境でふと越境がしたくなり

共通点僕は最大公約数

伊丹市 小川静観堂

伝統六百年のスモッグ消ゆ

白鳥三十四羽落伍者もなく北の湖

タオルまでごちゃごちゃ干して俸せそう

故里は遠くにありてお墓だけ

倉敷市 小野克枝

特急にお尻を向けて刈る農婦

ウナ電で身内集めて元気つき

うちの溝詰まらせ隣繁昌し

たより無い妻が黙々肩をもむ

桜井市 岩本雀踊子

うれしく酔えば妻もうれしくて

腹の立つ話は静かに妻がきく

夫婦とはあま柿しぶ柿つるし柿

堂々と肩で風切る票を持ち
鳥取市 清水 一保

幸運と云わず努力と誉め直おし
我が明日のドラマヘテレビ切って寝る

ボーナスもないのでのんびりする師走
島根県 藤井 明 朗

孫の守してとしよりくさくなり
何億の金どこへいった年末総選挙

人間性捨てたくなるよな昼の酒
岡山県 池田 古 心

足跡に茶碗と箸を残してた
落選が俺の清票連れてゆき

70年どうであらうとマイホーム
平田市 久家代 仕 男

減反におびえ農家の冬ごもり
鶏小屋へ補修がわりの藁囲い

大和路もここからと云う塔が見え
大阪府 森下 愛 論

瑞澂の硯を愛して文字が好き
セーターの胸まんまるい娘と歩き

信頼しきった素足投げだされ
島根県 小砂 白 汀

案内状まともに出かけあわてさせ
ウイंकをしてます只今停車中

灯を切ってからの話がまだつづき
日溜りをさがして母の立話
広島県 高橋 鬼 焼

ボーナスを使い果たして十二月
門真市 福島 鉄 児

算盤が合わないままに初明り
迎春へ嫌な想い出捨てましょう

三輪明神へ参拝
参道を濡らして冬の雨細く

消防車ピカピカにして火事待ち
洋式のトイレ説明読んでやめ
小松市 浅野 芳 朗

半分は寝ちまいガイドも腰をかけ
倉敷市 木村 千 容

かたくなにまじめ一途の輝く日
成人病定期検診

もうもとをとった余命を大切に
村田大僧正遷化

僧正は負うて帰れと駄々を言い
愛媛県 渡辺 暁 童

晩酌の三本目たれもいてくれず

春を待つ球根に似て日をかせき

見合いでしたと金婚に手がとどき

大阪市

酒田清子

ガタガタの両手に孫がブラ下る

宗旨とは別にケーキを買うて来る

貸借もないのに忙しい十二月

下関市

桜川不水

お供えを單にも出す名ぬしさま

妻の留守さむさむ暮るる台所

婦省の子ゲバで鍛えた腕で搦き

神戸市

仲どんたく

母と娘でカレーライス屋溜めている

かつくいいとは悲しい日本語よ

療養の思い出

片肺で今年も病庭の桜見る

松江市

岡崎祥月

俺に右並えして妻も老い

円満な解決金と酒が要り

勧告を蹴って五度目の腰をすえ

米子市

林瑞枝

エリート暮らし内助の苦心聞く

貧乏暇なし大望捨てぬ笑顔もつ

豪邸に世間と断絶されて住み

松江市

柳楽鶴丸

お月様が何故半分になつてゐるの

女房のわからぬところが恐しい

コンピュータへ僕の心は動かない

大阪市

今西章雅

スモッグをのがれる家もない長屋

健忘症折角のメモ置きわすれ

鉄筋の宿屋次々釜ヶ崎

岡山県

大森娛句楽

ウインドの前でボーナス押えて来

口実に欺されてやるのも師走

裏座敷完成

中庭も余生手軽るに娘ませ

笠岡市

出原真奇

農政問題（一句）

百姓をおだててみたり叩いたり

病院にて

先生は嫌だが診立びたり合い

当然な事してますとナース云う

西宮市

野呂鵜汀

十二月行く先のない急ぎ足

得意のポーズそれは貧乏ゆすり

妻の座は夫を信じ子を信じ

倉敷市

藤井春日

姉さんの幸福願って先に嫁き

ひき初めの絃にゆかしく梅薫る

情熱は晶子に劣らぬ娘に育ち

岡山県

田村藤波

目で問えば母はやさしく目で答え

冬木立自分の靴音だけ高い

母と娘が刈る田に秋の日早くおち

東大阪市

久米奈良子

母に生く書の山河のなお険し

防犯ブザー女の城の楯として

B足らん私もシミが殖えてきた

富田林市

浅川八郎

煙草を見付けられ医師に笑われる

園児にも英雄いました泣きません

メッキ時代既に去り恋稔る

兵庫県

磯野与志

重い重い雪雲 低い低い天井

がんばってがんばってふきのとうが出
退院の車一気に家につけ

芦屋市

丸川初甫

訪ずれる客もなし尼霜を掃く

ゴルフとも釣とも見える皮ケース

療友の賀状がつづく十年目

今治市

越智一水

ひざを抱く女愛人まだおらず

されど灯をともし若者貧に耐え

さしてよしささぬでもよし花の雨

兵庫県

大江秋月

塵ひとつ捨てられもせず無人駅

いいことがありそう朝の鏡ふく

大自然に挑戦をする靴を履く

岡山市

川端柳子

愛情がおきかえている筆不精

こうしたのであろう亡き母よみがえり

香煙のゆらぎに

旅人に明日が見えぬ星あかり

大阪市

市場没食子

古稀近いくたびれ顔でまだ勤め

悼 柳兄和田玄水（二句）

細くとも朽ちし柳の幹惜しむ
思ひ出は句会に釣に盃に

堺市 藤井一二三

政治には遠く選挙のピラを貼り

横に這う蟹宿命に逆らわず

選挙カー格の家も容赦せず

小松市 四方天弘実

隠居部屋テレビも置いて離される

人間の抵抗風があざ笑ひ

疑えば益々詐欺犯らしくなり

富田林市 岩田美代

消えかかる虹など見てるひまもなし

十二月疲れた貌が振るタクト

イエスに似た髭のギターでしびれてる

大阪市 横倉富久一

団地へ嫁して浮動票となり

真相の裏の真相聞いてくる

ふところの温みも届けてほしい文

鳥取県 谷無閑

うぬぼれが又凄腕にあやつられ

十二月親には早く子はおそく

事故現場もう示談屋の顔も見え

松江市 吉岡通児

無駄骨と知りつつ今朝も落葉掃く

算盤に合わぬ勘定となった意地

よんどころない事情はつきり金がなし

熊本市 楠田ひで子

お雑煮の餅も少なく老夫婦

雑踏の列車故郷へ近くなる

紅梅の華美ひやかな庭に咲き

和歌山市 土谷城石

身二つで戻る自由の成れの果て

待ちぼうけ義理のコーヒー飲んで出る

梯子酒つけ馬伴にして戻り

岡山市 荻野鮫虎狼

ライバルの無い人生を持て余し

造花だけ残し病室静かなり

人が皆休む日あごひも締めて出る

和歌山市 西尾公作

もう恋の眼なり茶房に向いあい

雲流れても自由の天はなお高く

情報に弱い日本に余力あり

大阪市 有信 新之助

慣れたもの電車がきたらすむ話

予期したのもあり計報に喪服着る

クス玉のハト役目の済んだ空を舞い

八尾市 香川 酔々

軍帽を真直ぐかぶる社会鍋

木枯しに押されて帰る家があり

客席は禁煙舞台は一服し

出雲市 王 紫

ある願い目なしダルマを買う師走

まん中に神の眼が在る右左

その時は笑えなかった後日談

愛知県 大谷 月都

鉛筆を鋭がらせておく想を練り

吾が子よ働き蜂の父でよし

鹿児島市 土岐 トク子

愛憎をこえて血と血が通い合い

御全快を祈りつ後髪引かれ

唐津市 新岡 回天子

飛びついた犬持てあます娘の晴着

四五匹で虎を追う犬たじろかず

八尾市 古川 鶴声

ミニで来て寒いと炬燵へモグルなり

根性のないのが群れて騒ぐゲバ

堺市 伏見 茂美

マイホームそろばん無理とはじかれる

十二月奈良巡拝

春日の森霧の流れに鹿が鳴く

大阪市 島野 大吉

ぶち撒けた帳簿税吏に励まされ

アメリカで日本のめしが好きになり

大阪市 西川 誓二

還暦の年を迎う(一句)

還暦の年になっても亡母を恋い

買う当ても銭も無いのが暮れの街

久留米 永松 道雄

ポチ抱いて鈴下駄鳴らし初詣

当り年心機一転金金金

西宮市 島居 百酒

一応はホステスいや嫌して靡き

正月の外泊宛に帰院さし

加賀市

細呂木魯木

泣き笑い男の味方に酒があり
お互いの夢も話題に朝の卓

京都市

清水谷句楽坊

南無三宝かくした年が豆で知れ
豆一粒これ一年かとおまみ上げ

★

西尾 栞

十二月フルーカウントとなりけり
中小企業持ち駒のない十二月
張り替えた障子の中に母います
燃えもせず冷めもやらずに珊瑚婚
元日の書斎水仙の黄に對す

北川 春 巢

目鯨を立ててと夫ト氣に障り
爪小さいのも恋人に見てもらい
雑学の大家どこへも顔を出し
土曜日の半日判捺す機械なり
引越しの荷が床にあるお正月

若本 多久志

湯どうふにして老妻の手をはぶき
生きる歡び遺書改める年の暮

人波にむなしさをふと暮の街
古稀近し悔も無く聞く除夜の鐘
一休の教えしみじみ一里塚

菊沢小松園

是々非々の非ばかり続く暮近く
過疎過密地球片寄りもせず廻り
真四角に座って子等に嫌がられ
多勢の中の一人と眼がからみ
一筋のみちたゆみなく歳明ける

清水白柳

祖父曾祖父わが家の歴史そのあたり
コンピューター逃げ場を教えてはくれず
阿呆やなと屈意見くびられ
うなされた焦り布団の重さから
オバサンひとり携帯マイクからこぼれ

川村 好 郎

二級酒とわかりこの頃やめてます
割れもせぬ約手ばかりがある經理
恐ろしいことに六十の恋心
妻のいびき ぐらしの歌と聞く夜半

碑弓彦氏逝去

痛ましや射抜かぬうちに絃が切れ

指先に

高 鷲 亜 鈍

指先にふれる花唇は儚い美
不精艶緑葉が匂うナルシス
月よりの使者へオボゼは脆ずき
氷雪の下から炎噴きあがり
熊蜂の花唇へ挟む検温器
冷たく濡れて金魚てのひらに

元師は凍る花に蜂
花びらにふれてひそかな美の示唆
野の花に蜂はやさしく露を泄う
水銀が下る思いの朝みみず
茶が沸いてもほっとき先に読んでんか
タイミング悪しおあずけして犬の鼻
室に飽きしとしとしと雨に出る
文化の日便がないので気が暗れず
判らないことだらけ己れを取巻く
神か死か詩か悪魔は神に詩には無し
老友から詩集を出すとうれしい便り
借財が時効となつてから詩を覚え

川柳日記

麻 生 蓼 乃

(十二月)



消えてゆく民族もあり世は栄ゆ
四面楚歌ひがむ心がそう云わす
海底の貝になりたい気もわかり
ことはじめ昔は主婦も襷がけ
御会葬御礼の声路地の奥から
暇をぬすんで京の顔見世

めくらでもごつつう儲かることないか
死と背中合せに生きよう喇叭を吹いて
按摩即首はきらいさりながら
夫婦愛盲に片輪女副い
合意の心中は批判の外だ
悪友を粗末にしたなこれ女
五十女はひとりでしゃべる
座したまま花札してる夢に落ち
淋園でつぶれた目だという噂
読みもせず新聞などどるな
テレビ今や女、子供の占領化
イヤホーンでラジオに笑うばく一人

☆

梅志氏病む・そして急逝ノ

大手前病院へ一月二日入院・十五日急逝ノ

梅志句集

近日発送の予定

▼昨年暮れ、梅志氏から一月二日に入院されることを電話でうかがった。印刷所も中尾藻介氏のお世話で急ピッチをあげているが、校正ひとつお手伝いしていただけないだけに氏の急逝へ対し申しわけなく思っている。

▼前号大萬川柳の天ノ句は——歴史おもく斜陽のなかに和紙をすく——と訂正。正本水客氏作

▼近作柳樽岩谷二三枝氏作——有為転変雲よお前も移りゆく——と訂正。

川傍柳 初篇研究

(八十)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

602 親ちに因果地蔵の前であひ

水 砥

因果な地蔵塩ばかりなめている
地蔵尊お好きか塩や唐辛子

川端 因果地蔵は浅草、西宮稲荷の右の玉垣の外にあり、願をかけるものが堂のそばにある廻願車をまわすから廻願地蔵といわれている。その廻願が因果と聞こえるため、いつか因果地蔵と呼ばれるようになったのだという説もある。仁王門のそばで、諸人に小便をかける因果な地蔵だという説、また小便をさせないため番人になったという因果な地蔵説などがある。句意は観音様へ参詣の父親と吉原通いのどら息子が、因果な場所でパッタリ出会ったということ。

丸 同。「親ちい」がいかにも窮した表現かと思つたら、四編32丁にも「おやちいが叱りますとなぜ言わぬ」があり常套的な語だったらしい。

岡田 当時の人には、こういった軽い洒落——因果地蔵の前で息子の吉原行を暗示——を軽い笑いとして予想外に面白がつたことを理解すれば、一概にそうツマラヌ句とは片付けられない。

603 つき出しとミへて田中へ植込れ

秋 紅

川端 「突出し」女郎に売られて初めて見世を張り、客に接することを「突出し」という。「田中」は弘化三年に山谷町の一部を改名した元吉原のことで、その西にある田中町は、明治二十四年三月つけられたもので、この田中町とは異なる。句は、田中に対する植込みであろう。突出しと見えて、田中の遺手に指示されている。

すす掃の下知に田中の局が出

初 13

高須 「突出し」は次丁にも「突出しは厄病神の娘なり」があるので、そこで詳解してあるが、この「田中」は寮のある元吉原の田中のことではなく、多勢の馴れきった遊女の中へ、背後に「初見世」のピラを出されて、オズオズならんでいるさまを「植込れ」と表現されたのではあるまいか。

顔上げていなと突出し叱られる

一・31

に、その感じがよく出ていると思う。

前田「田中」は田中の局のこと。吉原の局見世という安女郎屋の妓、吉原田ン甫の中にある局見世というので大奥の局にひねった言葉で、ここでは遣手を諷す。突出しですべての事情がわからないので遣手が指導するといふだけの句で、礎稿に同調。

丸「わかつたようでわからない句だ。小生は高須氏のように突出しと思われて大勢の女郎の中に今植えこまれたように、なじまない恰好で坐っている……といったぐらゐに解す「つき出しと見えてつくねたやうに坐し」(一七・三二)と同想の句。

岡田「難解句の一で、今まで定説のない句。句意は高須・丸氏説の通りと思うが、余計なことながら、もう少し納得のいくような自説を述べてみる。吉原通いの人が俗に中田甫と呼べた田の中で、今日植えたばかりの早苗を見る。やがては立派な稲になるだろうが、ただ泥中に突っ込まれただけに、いかにも弱そうに見える。さて廊中に入ると新らしく見世へ出た人突き出しの新作が、顔も上げられないでうつむいている。それがまるで今、目にしてきた早苗のような感じに作者には感ぜられた。……という両者を取り合せての句作かと思う。とにかくこの句は、表現不足の批難はまぬかれまい。

604 突っぱったすだれの内でのんで居る

眠 狐

川端「突っぱったすだれ」は御簾で突っぱったように見える。吉原の引手茶屋はすだれをかけていたので、そのすだれの内側で飲んでいる。

突っぱるで忌中のように見えぬ也

薮 23

端シかな所での中での町

一〇・三

高須「仲の町の茶屋——すだれを外側に引っぱってあるので「突っぱった」ように見える。この表現面白し。

前田「贊。飲んでるのは酒でなくて、お茶であろう。茶屋の店先には鬼簾がかけて棒で突っぱってあるから「突っぱったすだれ」といったのである。この引手茶屋は、客の送り迎え、芸者をあげて酒盛り、遊興等の勘定、遊女たちがこの店先に腰をかけて客まじりたり、お茶を飲んだりした。

清「飲んでるのは酒であろう。この引手茶屋で一杯ひっかけて、それから登楼ということになる。

丸「清説贊。

岡田「吉原の茶屋の絵を見ると、風の流通のためか、スタレの上部の方に突っ張り棒を当てて、突っ張らせてある。洒落本などを見れば分かるように、遊客はまず茶屋でパイーのんで、それから茶屋の案内で登楼するのが通

例。それをしないフリー客は安い女郎を買うヤツに決められている。

605 そこら見て袂の桃を御用喰

五 扇

川端「御用聞きに行った先で貰った桃を、主人も誰もいないことをたしかめて、こっそり物かげで袂から出して食べている。写生句。

九・11

雪隠で葡萄一房御用喰

高須「当時の御用聞きとは、註文を聞いて歩いた酒屋の丁稚のことで、短かい袂のついたオシキセを着ていたもので、その袂の中には、いろいろなものを入れていた。

遊びたい御用の袂メンコが出で、御用のあいまには上手に遊んでいた。

前田「両説に贊。「そこら見て」がよくきている。

清「贊。ませた御用は「どっからか御用煙草を出して吸ひ」(一四・20)

丸・岡田「贊。

若本多久志句集

老いの坂

(大陸巷談)

句碑せんさく

東野大八

本誌十二月号の巻頭で、中島生々庵主幹が「句碑」の碑について述べていられるのが眼についた。かつて私も同様のことを考え、その出所についてセンサクしてみたことがあるので、折やよしとそのノートをひっぱり出して書くことにする。

生々庵さんは、なぜ「句碑」に卑がついてしまったか、の疑義のようである。まず「中国語新辞典」の「卑」の頂から入る。卑①②ひくい③いやしい④いやしむ⑤へりくだる(説話不抗)言葉がごう慢でなく、またあまりケンソシしすぎることもないとする。この文字を付した用語には「卑汚」「卑官」「卑府」「卑視」「卑微」「卑葬」「卑職」など沢山ある。これらのものはすべて、が、いやしいものを表すことできている。

問題の「碑」は、石碑、いしぶみの二例で片づけられている。なぜ、石に卑しいとつけ碑と称するのか、問題はここにある。

私が戦時中、馬をひいて洛陽攻略戦に参加した際、洛寧というところで、すばらしい卑林によく行き当った。高さ四メートル大のものから、二メートル前後の、大小さまざまな碑石が、洛陽の肥沃な田畑の中や丘、堤林など随所に林立しており、多いのになると五十数個にも及ぶものもある。孔子、老子、管子などの儒教、詩書五経のたぐいがそのほとんどで、文字はあらゆる諸流の筆法で書いてある。

洛寧付近は三国志の関羽、曹操が縦横したホームグラウンドだけに、許昌、新鄭、洛寧一円には、関帝廟が多く必ずそこには、関羽賛仰の豪壮華麗な顕章忠魂碑が多かった。

私はそうした碑林の中で、必ず幾人かの石刷り屋をみかけた。北京の東安市場では、こうした碑刷りを専門に売る店があり、「蘆橋曉月」や寒山寺の有名なものを、一枚七十銭で買い求めた記憶がある。彼等は、おそら

くそうした都邑での碑帳店へ売るための、いわば職業的な連中にちがいない。私は、その中の一人にきいてみた。村夫人然たる純ぼくな老百姓は、こう答えた。

「私は碑帳を作るためであって、職業でやっているのではない」

彼は碑帳店渡しを否定していたわけだが、そんなことは私にとってはどうでもよい。現地召集の中国語に堪能な戦友が傍らにいたのを幸いあれこれと碑についての、センサクをはじめた。手にした軍用タバコの一箱に相好をくずし、その品のよい老爺は、いろいろと碑のことについての、世間話をはじめた。

碑林は陝西省長安の旧学府内のものが、中国では筆頭で、その数は数千におよぶといふ。その碑亭のあるものだけでも三百におよぶといふ。碑亭というのは、国宝級の碑で、風雨から老朽を防ぐために設けられた建物で、千円札の裏側にあるお堂の如き形態のものをいう。日本でいう碑披露堂である。

「詩書五経、孔孟先哲の語を記すものも多いが、大半は先生、書生を問わず、韻をふんだ名吟詩章のオリジナリテイに富んだものが多い。名吟、名筆、著名な作者名ものものは亭がつくのである。唐詩選社中のものがやはり圧巻である、碑銘のいしぶみというわけだ」と彼は語ったことである。私は川柳、俳句の句碑について、彼に説明した。彼はうなずい

て碑銘だなどといった。碑銘とは韻をふんだものをそう呼ぶ。碑とはなんぞや、それは角いものをいい、丸いものは碑と呼ばす。碣と呼ぶ。これが碑の正確な扱い方である、と彼は説明した。今もその点を、さきの辞典にてらすとまさに彼の説明は正しかった。辞典にいう。碑銘Ⅱ韻をふむ碑文をいう。石碑は丸いものを碣、方なるを碑という、こうみえてくると、句碑と呼ぶには角型のものしか資格がないことになる。中国式に呼ぶと原型尊重の丸い自然石の句碑は、句碣と呼ぶべきである。

さて、この辺で生々庵先生の最大の疑問点である石扁の卑に入る。

周代以前の古書といわれる「華陽国志」に拠ると、石に刻字して階（きざし）に立つ山門も同じ、神仏の一面に在るをもつて、神仏の偉霊により、自らが卑下していしぶみとする——とある。こうみると「卑」は自らのものとなるわけだ。

また、もう一説がでてくる。

「中国小説史」（魯迅著）によると、そのへき頭に「小説」なるものの言葉の解明がある。

小説という言葉は、古くは莊周（莊子）が「小説を飾って高名美譽を求める」とある。この小説は、後のいわゆる小説とはもちろん同じではない。小説家なるものはけだし神官から出る。

「小説とは街談巷語の説である。左伝には馭者の頌を載せ「詩経」には草刈りや、木こりにたずねることを讃美している」

要するに巷の大衆層の中に口にされる卒直な意見や愚口やそしりや皮肉を、神官はこまかくそれを記録する。そして地方事務官はそれをみて「過があればこれを正し、失があればこれを改めた」とある。

「神官の流別をたどるにおよそ三派がある。その一つは雑事を叙述し、その一つは異聞を記録し、その一つは瑣語を集録する。唐、宋以後それらは、誣まんして真を失うもの、妖妄をして惑わすものも少なくない。

しかしながら勸戒を寓し、見聞を広め、考証に資するものもまじっている、さればこの古制も乱雑だからといって勿論落すべきではない」

あまりくどくど書いてもせんなきことなので後は略すが、神官は要するに、最低の小官吏か、もしくは民間人が手当を貰って、その職を果たした。文字通りヒエカアワのような微賤な小官であったわけだ。

烈女貞婦孝子義人の碑は、神官の記録によって生じることになり、その碑の生産者は石工であった。石工、土職のいわゆる土師（はぢし）は、庶民の職階制でも最も卑賤とされていたのが、中国の古制の特徴の一つで、植輪づくりの土師は、その墳境にハニワでタッ

チすることによって、他の庶民との均衡が保たれたとも古い記録にある。

このようにみえてくると、石碑の中の卑は、どうやらさまざまによってなすユエンが沢山あることになる。孔子廟（山東省曲阜）には壮麗な歴代帝王の石碑が建てられているが、石碑の下には石亀があって、碑をのせている。世俗の墓碑の如く土中に石脚をさしていない。そこに帝王の碑の権威が保てているかみえる。墓石を卑とするは、それは生者の潜越である、と道教あたりは言っているが、句碑は、しよせん、神官の筋に通じてのこと、私の時点における解釈は、かくして神官説をとることにしている。格別ヒカンの解釈ではないと思うがどうだろうか。

・寒中お見舞い

申しあげます

郵便番号 852

長崎市新大工町五

池田可宵

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

川村好郎

わが腰と相談してみて溝をとひ

本田 恵二朗

世はまさに企業高度生長、振り落されまいとするより隣りが十階ビルならこちらは二十階を建てようとして競う。自力を忘れただ勝たんのみ。倒産自滅の多いのもここに一原因があるろう。とかく真正面に詠めば理屈はなくなる批判自戒言をかくユーモアに詠んだのはさすがである。

無事だった子へ大声で叱りつけ

草 深 醉 升

交通地獄の昨今、どれだけ幼児を持つ親を心配させていることだろう。その上に幼児の誘拐とうるさい程子は注意されている。無事

だったのでホッとすること大声で叱る親心をうまく詠んでいる。

何処さんも悩みごと持つものを知る

大坂 形水

よその宅を訪問しても見られたくない場所ばかり、破れた汚れた蒲団は裏返して出すそれが人情である。自分の家はすべてを知っている。自分だけ悩みがあるように思うが、いずこも同じである。その悩みにどう取組んでゆくかが問題なのである。

おめでたい退院でない寝返りよ

三井 醉夢

ご子息が眼病のため入院され、最善の治療看護にも関わらず、其の効無く退院された。心痛疲労の作者の心境察するに余りあり。其の悲痛の中にかく詠まれる僅かながら残る心の余裕を私は敬意を表したい、そして全快を祈りたい。

日の陰をくれた落葉よ炊いてやる

水粉 千翁

大自然に背を向けた生活、天地を離れたものの考え方、そこに人生の大きな不幸があり混乱が生ずる。落葉一つにも感謝してゆく豊かさを忘れていないだろうか。

御近所の計算通り暮したし

藤本 礎山

「あすこの家は少くとも〇千万はあるだろう」「奥さんがしっかり者だから倅せなお宅だ」ととかく噂するのが御近所である。人の花は赤いのが常である。その噂されている側を詠んだ含みの多い句である。

ふところの金がいや味な口をきき

有 信 新之助

金を集めることも大切だが、金を何に使うかということがより大切だ。若し金がもの云えばどなり散らすかも知れぬ。このうちはいいことに使ってくれるぞと仲間を誘って行くような金の使い方をしたいものだ。こんなユーモアの句を忘れていないだろうか。

(次号は若本多久志氏担当)

川柳家必読の「笑いのテクニク」

秋田実主宰・不二田一三夫編集

三月号「漫才」

定価 百円
送料 六円

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二二八

・近作柳樽・

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

夫らしく勞わり夫らしく小言

堀江 芳子

句主の夫君、正朗さんをよく知っている私にとっては、この一句全く胸にジンとくる。句は人格という言葉があるが、ホントウに素直な良い句で、小言も全く勞わりのある小言である。らしくを重ねたところ巧いもので、毎月の、正朗さん、芳子さんの句境並びに技術は益々佳境に入ったものと感心している。

染まらないもみじ悩みのある如し

坂東 若芽

単なる擬人法におわらず、心境を詩った佳句として推奨する。

デパートの犬は値段がついている

脇本 政己

どこにでも、句が落ちていくという良い見本で、可愛い小犬の顔がちらついてくるユーモアが大変嬉しい。

枯葉ばかり集つて日溜りの平和

来住 タカ子

屋上の日溜りに、平社員が或は女事務員が集っている句はよくあるが、それを象徴するには、余りにも美しく、また枯葉という淋しいものをもってきて少しも暗くなく、平和の文字が効いた旨い句だと感心した。

口ぐせの馬鹿が出るほど癒りかけ

中谷 利美

常に馬鹿呼ばわりした、主人も病氣には勝てず、暫らく馬鹿という言葉もきけなかったが、このところ病氣も癒りかけて、また口ぐせの馬鹿が始まった。腹がたつて病氣で寝こまれるよりは何ばかりかましだという気持。どうぞ一日も早くよくなられますよう祈ります。

ハイウエー平安京を斜に抜け

原田 輝親

ほととぎす平安城をすじかに。という句の文句とりの句ですが、古都のハイウエーを仲々面白く言っている。

新聞の広告値上げして読ませ

山田 止水

社会の木鐸としての新聞社が、諸物価値上げに便乗して、上げ底的な、二、三頁のPR版をいれて、読者を瞞着している許せない頂門の一針の句である。

わき水の静かさ何もかもしずか

生信 笑子

別に作らんとして作られた句ではなく、わき水を見ていた時にふと出来た心境句。俳句では、清水、という夏の季節があるが、全く俳句以上の句境です。

通勤の規則正しく駅で覚め

桑原 千里

慣性性となった自嘲の句ながら、句主はそれを苦にせず、健康に通勤出来る有難さ。

逆コース瑞穂農民廻れ！右

高橋 近江

川柳には、こういう風な面白い表現法も、自由に出来るたのしさがある。推敲を重ねた作者は廻れの下へ！をいれて右とした時に、快哉を叫ばれたことと思う。

その他うまい句、同感句を左に。

好敵手でしたと勝つているゆとり
M寸はもう父だけの用になり
すれすれの線で儲けて叙勲され
ランドセル買家に買わず予算にし
ひやかしの客へ売り子の売り上手
言いたい事言うて臨時工やめて行き
スト権のない母今朝も米を研ぎ
逃げ道を作つてやつたに躊躇する
呼出しも耳打ちでくる奥座敷
おしし雲わたしも一緒に流りたい
信楽の三代狸を焼いて食ひ
バストへの視線を感じての仕種

(次号は菊沢小松園氏担当)

史朗 小国 松子 満保 幽玄 軒太 十郎 浄美 生弘 寿年

私の好きなもの 5

清水白柳
正本水客
戸田古方

3・4がなくて

5も川柳

清水白柳

①川柳 ②古書 ③文楽 ④パチンコ

⑤お茶と甘いもの

①雨が降ろうが風が吹こうが、暑さ寒さも苦にしないで句会に出かけてゆく。もう好きという段階を越えているのが私の川柳だろう。どっちが本職かと聞かれても笑っておくより仕方がない程川柳にとりつかれている。いい加減にできない性分も手伝っているのだろうが頼まれたらいやとは言えないのも、好きな道だからでもあるが自分でも呆れている。そして忙しがつているのだから世話のない話だよく旅へ出て居られるが結構ですネ、と言

われると返事に困ることがある。物見遊山で出かけるのなら結構なことだが私の場合はそうではない。川柳塔社へ地方の柳社から主幹にきてほしいと言ってこられても主幹はご承知の通り、小児科医院の院長であり、医師会の役員でその他の公職を持っておられるから公的なスケジュールがいつでもつまっている仲々手のあいた日がない、そこで代理といっても副理事長や常任理事はそれぞれ病院長、社長、重役、店主などと忙しい人ばかりで日程がとれない時が多い。その結果職人で手のあけやすい私に、オマエ行けということになる。オッチョコチョイだと自分でも思っているのだがつい引受けてしまつて出かける場合が多くなるのだ。

そんな訳で好きも手伝って、フラフラと出かける。それがよそ目には結構に見えるらしい。しかしマッタク結構なことでないともいえない、いつでも忤に、アシタはどこそこへ行くぞといえそれで出かけられるのだから結構なことには間違いない。本心に心の底から喜んでゐるのだが、時にはこんなことをしていてもいいのかなと勿体ない気になることもあるのは事実である。好きなことにいつでも出かけられる、これが一番しあわせなことだと身体だけは大事にしている足が弱かったり、身体に故障があったりしては近くの句会にも出かけられないのだから、達者なのもありがたいことだと思つてゐる。

だから好きなもののNO.1は川柳だということになる。

②の古書も川柳書だけだから、1も2も川柳といえるかも知れない。調べるのがあつて頁をくついていると調べものをホッタラかし読みふけてしまつてしまうことがいつてもだ。好きだからそうなるのだろうと思つてゐる。

③文楽は若かりし時代の想いでつながつてゐる。十六七才のとき故郷の小松で義太夫

の三味線を習ったことがあるので、大阪へ二十才のときに出てきて、義太夫の三味線を習いにゆこうと思ったところ、大阪では旦那衆の芸事でとても職人のワタシたちの習えるものではないということが判ったから止めてしまったが、小松には「お旅祭」というのがあって、五月十五日の祭礼には各町内が当番で何カ所かの曳山が出る。その曳山というのは三米角位の山車で屋根は千鳥唐破風造四本柱でウシロはチョボ語りの席になっていてその舞台上で少女歌舞伎を演じるようになってい

る。昔は町内の子供で演じたらしいが私等の頃には遊廓から子供を借りてきて演じたが月のもがあるようになった娘は汚れるといつて曳山へはのせないで十二才位までの子供ばかりだった。そしてチョボ語りは全部素人だが、太夫も三味線もそれぞれ立派な芸を持っていた。因会ともう一つのグループがあって年に一回春の節句に福助座という小屋を借りて芸の競演をしたものだった。

だから当時三味線を習っていたワタシも大正十三年の四月三日にはその舞台で三味線を弾く皮切りをしたこともある。父が三味線で鶴沢松ナニガシという名を持っていて家でよく弾いていたから自然好きになったのだらうと思う父が使っていた擔が不思議にもまだ手元に残っている。大方母がカタミに持っている

たのだらう。そんなことから文楽が好きで御霊にあつた頃はよく聞きにいったが最近川柳に追われてあまり行けないが好きなのもの一つである。さて

④のパチンコだが川柳塔社へ出かけても、心齋橋筋で球をハジクことが多い、天王寺附近でもいつも行くところはホトンドきまってる。しかし儲けたことはない。球がなくなるまでハジいてなくなったらサッサと帰ることにしているからだ。無念無想になるためであり、雑念をはなれる気分転換のためだからだそれだいいと思うから好きなのでパチプロになる気はサラサラ無い。

⑤お茶と甘いものといつてもお茶はガブガブ飲むお茶なので野暮ったいことこの上なしであらたまつたお茶席は習ったこともないでとても苦手だということをお断りしておかないとお招きを受けるに困る。甘いものは食意地が張っているだけのことである。

結論は1にも2にも川柳で34がなくて5も川柳というのが本当かも知れない。オソマツデシタ。

五つのテーマ

正本水客

(1) 川柳。川柳は好きとか嫌いとかいう以前

の問題である。酒もギャンブルも嗜まない私にとって、常に身近かにあつて心のモヤモヤを解消してくれるもの、精神の転換と充実を果してくれるもの、それが川柳である。

(2) 女。男と生れて女性の嫌いなものがある筈がない、漫才ではないが、あつたら責任者でてこいである。句によつて好きなタイプを知って戴こう。

「歩巾あわして悲みを見せまいとする」
のそう明と慎み。

「爪切つてあげて付添い別れる日」
の何げない親切。

「あんたさんは甘党だから別にされ」



磨かれた伝統の味

司菓子

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
支店・各百貨店のれん街

の飾らない気転。

「ゴムバンドはめたままなる妻の手よ」

説明を要しない。点をかせぐなという蔭の聲は無視することとする。

(3) 映画。この項を芝居、漫才、浪曲、角力からプロレスまで範囲を拡大したい。

映画。小学校時代は東京の神楽坂の上に住んでいた、近所にU館という活動写真館があった。毎週皆勤であった、実写（ニュースのこと）、喜劇、連続大活劇（彼女の運命やいか」という連続ものが四巻ずつ何週間か続く）次がウイリアム・エス・ハート主演、二丁拳銃の西部劇といった調子のワンセットを、きっちり始めから見ないと気が済まなかった。

芝居。母が元氣でいた頃は、毎月歌舞伎座と中座へお供させられた、新国劇などは余り好きでない母の方がお供してくれたのかも知れない。こんな有難くて優しい親孝行は外にはない。

浪曲。浪花節的、義理人情の世界と古いものの代表のようにいわれるが、私はその厳然として変らない古さが好きだ。大阪には常席がなくなったが、夏と暮れのA座の大会は欠かさない。ポツとでの歌手がすぐりサイタル等と思いついている時代に黨童あたりの独演会が何故持てないんだろうかと、ちよつと憤慨もしてみる。

(4) 読書。本も勿論きらいではないが、近頃

は固いものや小説などには手がでない、もっぱらノンフィクションものである。しかしこの項は山歩きと甘いものの食べ歩きに置換えたい処だが、次の項に集約することとしたい。

(5) 旅行。北海道も行ったし九州も回ったし日本中ゆくところがなくなったようなことをいう人があるが、私がいう旅とは、こういう観光路線にのった定食コースの旅行ではない。車の雑音や観光客の足に荒らされていない地を探して自分の足で訪ねて回りたい、これが私の今の願いである。郷土の味と川柳とは勿論切り離せない同行者である。

昨年、万の、杜の両君とで訪れた越前の旅を、サンプルとして記行的に照会して、この項を終りたい。

④越前平泉寺

北陸線の福井で越美北線に乗り継いだのは昼をちよつと過ぎていた。普通なら有名な永平寺の方へ行く福井鉄道に乗るわけだが、その日は生憎く私鉄ストの最終日に当たっていたので、まよふ行ける処まで行こうと、地図で目的地に近かそうに見える越前大野で列車を捨てた。駅前に一軒あったコーヒ店に飛び込んで平泉寺への道を聞くと、車で行けば大したことはないというので一安心。

次に今夜の宿の確保と、その付近に杉山鉾泉というのがある筈だというと、サア余り

色紙短冊
書画用品

大坂おどし市
丹 青 堂
もんやせにやせに

聞いたことありませんなあといいながら電話帳を繰ってくれた。昔は三十六堂六千坊が辺りの峯々をうづめて、奥州へ落ちる途中で義経も立ち寄ったと伝えられているが、今は寺の跡はなく白山神社の中宮として残っている。天を突くような杉の参道を抜けると一面の杉木立の中へはいり。高い梢の葉洩れ場に氣付いてみると、辺りは一面の苔だ、見渡す限りピロロドを敷きつめたようにひろがっている。苔は点在する礎石をなめ、不灯師の台座を埋めて平然としている。

京都の苔寺などのように大事に大事にされているのとは違って、野放図な美しさと、人

に見られることに馴れない初々しさが心にしみる。杉の緑りと苔のみどり、名峰白山への古道は何処まで続くのであろうか。

「栄枯盛衰なめつくして苔然す」

来るときには通らなかつた表参道には昔僧徒が丸頭竜川から手送りで運んだという石畳がくろくろと続いている、石の一つ一つの間には一切経の朱文字が書かれていたとも言う。道は菩提林と呼ばれる杉の森を抜ける。振り返ると湧きあがるような杉の濃緑が盛り上って、ひどく印象的だった。

「菩提林杉は緑りを吹きあげる」

◇杉山鯨泉

平泉寺から車は半時間ほど走って杉山口、此処からは小型がやっと通れる谷沿いの林道を3キロ、小高い丘に出るとパッと視界がひらけて三百年はたつと思われるワラ屋根の一軒家が眼に飛び込んでくる。母屋の窓は開けたままで燕が自由に出入りしている。いっこうに旅館らしくない。横にまわると、宿の看板が遠慮したような玄関に掛かっている。湯は沸し湯だが粘土のような土が大きな袋にはいつ沈んでいる。さわるとサツと辺りが濁って、いかにも何かに利きそうである。

裏手の山水を引いて作った小川には大小のウグイが群をなしている。湯上りの腹がグウと鳴ってきた頃、山菜料理がズラリと並べられた。

▽うぐいの刺身。香りのいい山ワサビが、雪の下若葉にのせてあり、八重桜の花が一輪そえてある。

▽わらびの三杯酢、溶けるような舌ざわり、みどりの色がさわやか

▽ぜんまいとくるみの煮き合せ、いちいの若芽が色どりをそえる。

△岩魚の塩焼、松葉の青が敷いてある。

△山うどの二杯酢、桜んぼの赤が美しい。

△天ぷら、岩魚、木の芽、くるみ、ちしや

△山わさびの茎の酢のもの

△とろろ、山ワサビの緑と玉子の黄が食欲をそえる。

付近の溪や山で採れる自給自足の材料で、どの一品にも心がこめられていて、暫くは手をつけるのが惜しく眺めていた。

翌朝ふと眼が覚めると、裏山へわらびを採りにゆく人の声が楽しそうに聞こえてきた。

「わらび採りの人声うら山に吸いこまれ」

まず食べる物

戸田古方

一番好きなのはフラウ・シズコ。おっと忘れちゃ困りますよと子や孫も申します。だがそんなアンケートではなさそう。一から五まで順番をつけてといわれますと、堅くなつて

します。まあ、ぼつぼつ……

①やっぱり食べるものから始めましょうか。好きな食べものの第一は揚げ物としておきましよう。体重八〇キロが一キロ減ったと喜ぶしながら、油気の方へ箸がうごきます。齢のせいかもしれません、近頃は野菜の天ぷ羅を所望したりします。それにフレンチ・ソースをかけた生野菜も大好き、もう昔ほど油濃いのものとはいわぬようになりましたが、時にはパイタリテイの補給も忘れんようにしています。

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機株式会社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

ら逃避した先生でした。家業であり、天職と押しつけられた商売が、私には儲けるために掛引とギャンブルを繰返しているとしかうつらなかつたのです。つまりは、私に甲斐性がなかつたのでしょう。だが、自ら選んでなつた先生、いうことが通じないとあつては、と考へだしたのが、川柳、シナリオ、漫画の組合せ。川柳でテーマを見つけ、シナリオで話術を組立て、それを絵で表わす、所謂「黒板紙芝居」図解です。学年の始めに一年間のス

解の方法はスロモアの私でもタイミンクにかかわりなく、私なりのテンポでついて行けたからでした。それが歴史のもっている現実との密着であり、歴史そのものには行動性が少なかったからでした。

安全、逃避を考える私の卑怯と通じていたのかもしれませんが。きのうがわかってこそ、あすへの備えありといひながら、明日の予言も、理想以上の空想に近いものでした。宗教を語るにしても、自らの信仰の過程を繰返しているにすぎません。ほんとうに迷惑な教師

真実一路、ケレンもゴマ化しもなく、不安もなく、全身でぶつかってゆけました。だが、やっぱり最近、私のひとりよがり、何人がついてきたかどうかと気になりました。近頃、多年の功により、とかで表彰されたりしますが、全く汗顔の至りです。こんなのを日暮れて道遠しというのでしょうか。

⑤講義は歴史と宗教が主でした。私は何故歴史が好きかということですが、その前に、

でした。敗戦前後、鳥なき千里の蝙蝠で、人手不足の穴埋めはしてきたものの、若い学士たちが出揃うた今日、経済学部出身という肩書に戻って経済の話をする機会が多くなりだしてきました。勿論、私に金儲けの話なんかできるわけがありません。

私の話はその反対に、金儲けを考えるから世の中がよくなるのだというのです。どこまでも私は、前向きに歩けぬ人間です。聞

私の「古方」という号は、路郎先生が、私の

それまで使っていた「孤蓬」に代えて、も

と歴史を勉強せよとつけて下さったのです。あらゆる目の前に見えている現実という現実、人にもせよ、物にもせよ、歴史的發展の末でないものはありません。愚鈍な私には現実の理解はその過去を知る以外にはないと思っただけでありました。それに、歴史的な理

本主義でも、社会主義でもない。キウを優先する経済思想です。経済の世界にも宗教を持たせようとしているのです。だがどうも、総選挙に惨敗した社会党のテーゼに似ているようにも思えてくるのです。どこまでも私は私です。(一九七〇、一、二)

川柳徳川記

(十一)

富士野鞍馬

家宣いえのぶ

前將軍綱吉に男の子がなかったたので、甥にあたる(綱吉の兄綱重の子)甲府の徳川綱豊が、宝永六年(一七〇九)家宣と名を改め、四十八才で六代將軍となった。その時に甲府十五万石は柳沢吉保がもらったのである。

家宣は、着任早々先代が発令した「生類憐みの令」を廃止し、学者の新井白石を政治顧問として、側用人間部詮房を起用し、大老柳沢吉保をやめさせて、善政を布いた。

そうして正徳二年(一七一二)五十一才で死んだ。將軍としてはわずか四年間であった。文昭院殿という。

家継

七代家継は家宣の子で、正徳二年(一七一二)四才で將軍になったが、同六年八才で早世した。この間先代からの引継、間部詮房、

新井白石のコンビで政治は行なわれた。

詮房は、日夜幼將軍の側についていたので家継の生母月光院との間に、とかくの諍が伝えられている。詮房は頗る美男であった。

絵島事件

月光院は強い勢力を持っていて、従ってそのお気に入りの年寄(女中取締)絵島はまた大奥において絶大な権勢であった。その権勢を利用して、利権を得ようとする商人たちの贈賄には、目にあまるものがあつた。そのころの大奥は、それだけでなくも乱脈をきわめていた。

正徳三年(一七一二)以来、度々の観劇招待をうけたが、正徳四年正月十二日、前將軍の法会が、芝の増上寺と上野廟に行なわれ、絵島は月光院の代参として増上寺に派遣された。その帰りに、呉服商後藤縫殿介の招待で大勢をつれて山村座見物にいった。その時の

醜態を、御徒目付が上司に報告したので、絵島は取調をうけ、遠島のところを月光院の口添えて、信州高遠、内藤駿河守清杉に身柄を預け監禁となった。そして二十八年後の元文元年(一七三六)六十一才で死んだのである。

この絵島事件は、山村座の俳優生島新五郎とたわむれたというので、色々に虚講妄説が伝えられ、新五郎が饅頭の蒸籠にかくれて大奥へ忍びこんだという話もつくられている。

久しぶり御代参りの戻り道 (七四二三)
幸いじや芝居へ分かる御代参 (宝十松三)
御代参和尚芝居へさそわれる (明三松三)

御代参段々事がもつてうじ (拾二四六)
新五郎うはつく筆さきてござり (二四四)
まんちうに成作者もしらぬちえ (初四)
まんちうは女の智恵に大き過ぎ (三二五)
せいろうが度々におよんでそこがぬけ (二四四)

八木摩太郎著

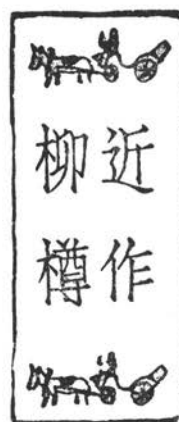
古川柳に詠まれた堺の人々

送料共 七五円

島へ島忍んだ果てが島の沙汰 (八八四)
美しひ流人大めしくいに成り (四五)

— 大めしくひは信州 —

など外にも多くの川柳が詠まれている。新五郎は三宅島へ流された。



菊 沢 小 松 園 選

下関市 志 賀 木 石

お隣りは好かんが落葉に罪はなし

小さけりゃ小さいなりにハゼ紅葉

野仏も拝みハンドルつつがなし

ええとこのように思える釜ヶ崎

それ以上どうもようせぬ肩を抱き

竹原市 三 宅 不 朽

からっばでせめて眠る間いたいなり

汗よ汗りくつなんかごめんだね

風の音風の中なる男親

大木を倒したあとの虚しさよ

ひたすらに思い憎み合い夫婦

倉敷市 本 田 八 笑 人

反省の春夏秋冬ままならず

赤ん坊の拳も頑張ってるぞ

堂々と歴史へいどむ作業服

何もかも不満週刊誌を丸め

掌の中の歩が成ることばかり願ひ

広島県 岩 谷 二 三 枝

挫折の日雲は何んにも語らない

捨て石の自負音なしでいる構え

風車ある日風に逆う夢を見る

放浪のキャリア野良犬尾は振らず

私は紅葉いのち限りを燃えまする

島根県 堀 江 芳 子

夫だけが通してくれる小さい意地

それからは笑って耐える事に馴れ

故郷を抱けば倅せよみがえり

両手から冬がしみ込む物干し場

言うだけを言って親子の仲になり

尼崎市 中 谷 利 美

作戦を練るジャンケンは眼をつむり

幼稚園女の嫉妬みせはじめ

大阪市 小谷葉子

値切られた分は秤で埋めあわせ
人生のドラマにいつも斬られ役
借金をローンと呼んで憚らず

島根県 志賀美栄

さしのべる血の温もりに逆ろうて
まわり道でも 私の道えらぶ
誇り持つ女にネオンあざ笑ひ
紅に染めてはならぬ人を恋う

大阪市 江城修史

尾をふって捨犬心あずけない
嫁がせて安堵のすみでわびしがり
新婚の二人にもどる共白髪
反骨の血も受継いで適齡期

育信の友へ心はなだれする

東大阪市 落合思月

振り向けば愛語はしかと聞けたかも
この友になにゆえ貧しさつきまとう

竹原市 脇本政己

キッスしただけよと母をあわてさせ
一と言が多い妻にて今日ももめ
よその嫁カユイところへ手が届き
公害と諦め都会のすみに生き

夕映にみとれとぼしい心知る

大阪市 河野君子

白砂青松コーラのビンがわれている
まとまった思索紫煙も生きている

大阪市 和田痴亭

芸術のむごさは流儀に耐えている
限界は見えず感じる齢で居る
年の功舌の記憶は狂いなし
ホーム炬燵親子の対話温め合い

こおろぎの声かすがち無縁仏
ヒステリーかぶりつきから戦慄
思慮分別ありすぎてまだ平の椅子

八幡浜市 別宮すき

東大阪市 宮西弥生

付添いのきれいな瞳にまどわされ
男勝りも一緒にかくす角かくし
十一時閉店自分の顔となる

一城の女になって酒・煙草
愛してはならない愛へ速くいる
ひとまずは月賦のすんで冬温し

神戸市 来 住 タカ子

最後の矢かまえて守る女の座

少年の視野にバラ色の的ばかり

悔かみくだき抜けられぬ泥の道

大阪市 小 出 智 子

寒桜 桜と言うに哀れなり

何時しかに妻と言う名に負われきり

斯かる夜は夫の寝息のしらじらし

八尾市 高 杉 千 歩

ささやかな奢りブローチあててみる

すて難き名画去年のままだに明け

ケタ違う晴着ボーナスはずかしい

大阪市 藤 田 頂留子

パトカーの音もきびしい十二月

着ぶくれてつみ残こされたエレベーター

汚職たえぬかぎり忠臣蔵は無事

鳥取県 川 崎 秋 女

猫だけに分る言葉で猫が啼き

なるようになるサと悟った十二月

幸福が来そうな朝の窓明ける

八代市 船 木 史 朗

第三者だから諦めろと言え

散る事を知らず造花の色が褪せ
泣いている膝でも猫は丸くなり

竹原市 簗 田 浄 美

地に落ちるごと眠るのを覚え

母さんの話黙って聞いてあげ

来る年へ二十才を意識する選挙

竹原市 生 信 笑 子

白バラの哀しや燃ゆるすべもなし

共稼ぎ味噌汁位とも言えず

許されて心に雪のふる日なり

今治市 古 野 伶 人

パパに似たりママに似たりで子は育ち

あれも毒これも蓄積される毒

茶に花に料理布施より多い寺

七尾市 松 高 秀 峰

人間の弱さへ保険勧誘し

本当の味方の方が反対し

これと云う策もないまま年を越し

大阪市 里 小 路

今時にこんな女中が居るチップ

真直ぐに帰えろうわが家の酒がよし

特急通過も一つ寒さおいて往き

富田林市 木 村 弥栄子

量よりも質へ密度の濃い逢瀬

生きている限り消えない傷を負う

はれぬいたばかりに個性つみ取られ

神戸市 横 山 孜 孝

おふくろの味とはうまいコマーションル

自動車ショー溜息だけをして帰り

正確に計った筈に味が出ず

大田市 藤 田 軒太楼

金の要る使途がぼけてる子の便り

今日も無事車窓に揺れるマスコット

鮎詰にされても都会の渦に生き

浦和市 吉 岡 茂

マイホーム住宅ローンも住みついて

ガス屋だけおくれ新築火を起こし

クリスマスツリー親もサンターになるを待つ

和歌山市 ふきあげ 虎 城

社会鍋ネオンの色に染まらない

股火してひとのキップをとり上げる

猫の目が光る弧愁を呼び戻す

和歌山市 増 田 めぐみ

誰も来ない門灯を今日もつけ

わたしのえらんだ道戻れなくても良い
物干し竿耐えて幾年曲りつつ

和歌山市 増 田 次 章

喫茶店待ちくたびれて瞳が出合い

抜け出したつもり茶房で顔合わせ

自由席料金の差を知らされる

愛媛県 澄 本 満 子

弁解はせぬ主義誤解のままでよし

ハイミスの寄らば切るぞと云う構え

好きと云う心が糸くず取って上げ

岡山市 谷 森 和 風

誘蛾燈罪なき虫まで誘き寄せ

肉ひときれ欲しさにライオン輪をくぐり

殺されて虫訴える口もなし

富田林市 川 端 文 一

あったかい電気毛布もひとり寝の

佗しくも夫婦別居のきのうきょう

寄せ書の皆それぞれになつかしく

今治市 原 田 輝 親

蛇行して逃げねばならぬ気の焦り

現われて動画の動き冬の蠅

ある朝の銀より白きちぎれ雲

岐阜市 市川 鱗 魚

団地族隣りも知らぬ旅に立ち

後悔を聞いてやる茶が冷えて来る

広島市 榎 田 英 詩

通りがかりの墓へ野菊を挿しておき

抜きたがる歯医者と聞いて向きを変え

守口市 岸 本 豊 平 次

ホテルの名拾い読みして高架の夜

スポーツを観るだけの子どもの足らず

高知県 山 川 勝 子

時々は聲になるも世渡りか

喜んでよいか今年の稲の出来

松原市 守 屋 万 竿

年の暮ジングルベルで歩かされ

一夜浸けだけで六三三が済み

守口市 樋 口 一 峯

生活が掛かれば女たくましい

大学生敬う人を見失しない

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

眼が見えず感が悪いと言つておく

施せ 施せと 和尚 言い

新潟県 高 野 不 二

熱帯魚のぜいたく螢光灯もつけ
銀行の裏から入る顔を持ち

羽咋市 三 宅 ろ 亭

誰に任す次代の子らの邪心なさ
マフラだけとりかえ女房若返り

仙台市 平 野 光 道

たんまりと貰ってポータスにある不満
政権に縁なき党のアドバルン

松江市 村 松 醉 歩

妻の座もふところ寒しな板よ
十二月妻を貞女として眺め

寝屋川市 福 富 隆 子

朝破った茶碗一日ひっかかり
物の値の所でちがうおもしろさ

岡山県 目 賀 芳 月

盃が湯呑みになってから軍歌
帰省する息子に白髪そめて待ち

大阪市 西 本 保 夫

平社員のままで判コのみちも欠け
上役の声に似ていて平社員

鳥取県 近 藤 秋 星
総選挙よりも紅白気にかかり

十二月サイレンの音よく響き

島根県 大森孝華

鼻風邪を吹きとばされた日のデパート
原色に染めて豊かに世を泳ぎ

松江市 大峠可動

君逝きていたわり合える糸が切れ
つきささる言葉背にして口とがる

札幌市 平野青夜

お互いに相手自慢のマイホーム
落選と極まり早目に乾杯し

兵庫県 高橋近江

何んならと探してくれた参考書
聞く噂目でたしかめた日のショック

泉佐野市 大工静子

道でないところ横向いて通り抜け
年賀状手本にするのをより探し

大阪市 河原林比呂路

うっかりと涙ながしたアイライン
肌着ひとつ干すにも知恵のいる団地

大洲市 堀内暁風

盃の手つき上戸と見破られ
絶対に白と母だけ信じ切り

せめてもの怒り解雇の名ではらし ドーランの素顔の見た美男美女	倉敷市 竹内翁童
もうそれでいいからいいからミニの丈け 見返してやるに涙も使い分け	新宮市 大矢十郎
断絶がここにもあった生き別れ 赤とんぼここらが過疎の村境い	松江市 津川紫吻
心ならず波紋の石を投げた悔 横文字は苦手と贗物とぼけとき	羽曳野市 麻野幽玄
要領よくやれとき真面目あなどられ 行楽の道は押し押し歩くだけ	竹原市 楠貞子
かまくらで恋知りそめし雪の国 なまじつか誘い調子にのせた悔い	岡山県 山田止水
秒読みをされてるような齡になり コンピューター人間の夢消してゆく	仙台市 川村映輝
	大阪市 大西為二

文化祭芸のないのが墨を塗り
自転車の後へ乗せる共稼ぎ

岡山県 本 倉 英 峰
人妻の短気であれば氣にならず
帰らぬに墓標に祈る幼ない手

島根県 梅 みどり
お茶うけにかた言語る孫も入れ
美しく歩く姿を娘にゆずり

鳥取県 大 山 果 風
さざなみはあまえるように岸に寄り
十五夜に夜景を添える波しぶき

鳥取県 林 露 杖
正確に刻む時計が恨めしい
プラットニッククラブではとても間がもたず

大阪府 岡 本 まさひろ
ビルの谷で一日ネッカラ陽がささず
年玉の集金孫に居直られ

島根県 中 島 英 子
多忙でも晩酌にだけ腰をすえ
無いですむ気楽な老いの年の暮

米子市 増 田 竹 馬
血統書付けたい程に娘が育ち

身に覚えあつて表情押えかね

宿毛市 瀬 田 美 知
川水のにぎりきらえばすみつけず
かゆいところに手のとどかない一人者

鳥取市 有 田 鹿 子
鎡となる子はおらず犬と住み
子と将棋負けても父は笑うだけ

今治市 今 井 松 花
討入りの覚悟師走の選挙戦
あつと驚いてやらねば孫は承知せず

今治市 真 山 国 彦
月からのテレビ二度目はさほどなし
立ち寄った大樹で自己を見失い

今治市 伊 藤 一 郎
物呉れる後援会に名を列ね
気が急けば急くほどチャック噛み合わず

今治市 原 田 輝 親
あの方も効くと指圧で押えつけ
肩車されてて唄う黒猫のタンゴ

島根県 安 部 凡 太
羅針盤五人暮しの舵を持ち
お帰りは魚拓となつてお供する

今治市 薦 本 昌 道

なんとなく嬉しいことがある若さ
冷戦の夜をサタンに囁かれ

和歌山市 吉 野 富 子

アリバイに茶房のマッチ妻に見せ
停電へ目明きの不自由笑われる

今治市 渡 辺 南 奉

メロドラマ妻もよろめくかも知れず
神様のうそつき裏目出てばかり

和歌山市 島 本 泰 子

着く予定こっそり知らされ駅で待つ
待つ姿勢待つ身になってよくわかり

出雲市 坂 垣 草 丘

禁猟区のような祖母の家で飛び
四十づら後につく語は甲斐性なし

笠岡市 山 本 柏 生

カーブーム両隣までやって来た
土地ブーム荒地がみんな目をさまし

京都市 藤 本 征 山

白黒をはっきりつけて座がしらくけ
初誕生十本箸がかきまわし

鳥取市 藤 本 鎮 也

団地には団地としての知恵が要り
冷凍と言わず出しとくえびフライ

米子市 源 氏 勝 久

花名刺妻が気にせぬ歳になり

黒髪を誇っていたのにびんの白

鳥取市 藤 本 和 宏

争いが好きでないから貝になり

口下手で道を問われてつれて行き

豊岡市 不二 本 和 久

貧乏はうちで慣れたと娘は嫁ぎ

安全を守ればうしろの邪魔になり

鳥取市 藤 泰 嗣

紹介は俺がしたのに腹がたち

勇退の出来る若さを羨やまれ

鳥取市 米 原 一 稔

名も思い出せないままにさようなら

安全な日々へ若さがもの足らず

鳥取市 藤 本 佳 女

古木に料理のヒント教えられ

アポロもうビッグニュースを遠ざかり

鳥取市 林 す み こ

正確な味覚は母の塩加減

くどい程愚痴こぼされてまだ嫁かず

大阪市 本 間 満津子

季節もの季節に喰べて有難し

出来心つい手を出してもてあまし

大阪市 鈴 木 生 仏

正月はコタツが先に来てすわる

病む妻のそつと手を持ち脈をみる

大阪市 木 村 渥 水

クリスチャンたった一日だけですみ

脈はかる看護婦の手は色気なし

大阪市 花 田 繁 子

目覚しのいらぬ寝床も老の幸

出来心でもいい善は善のうち

大阪市 松 岡 進

公害の街ゼンソクの子が育ち

愛のぬけがら昔の顔はどこえやら

大阪市 田 中 多 幸

生れ故郷に住んで子供になる余生

腐れ縁切れて互の意地っぱり

大阪市 半 田 夏 生

百円の差ががら空きの急行車

大阪市 平 井 露 芳

阪急三番街

公害も魚も知らぬ川流れ

諫早市 原 田 明 春

待たすだけ待たせ電話で断わられ

岡山市 武 元 柳 子

なんべんも夫に忘年会があり

高槻市 山 田 スミ子

老人のかなしさ不用品を大事がり

鳥取市 藤 本 恵 子

捨て猫へ私のミルク分けてやろ

鳥取市 河 口 忠 志

ネット裏子の投球が気をもませ

鳥取市 山 本 阿也女

娘の夢を展覧会でふと見つけ

大阪市 吉 野 志 津

新築で老人困まる椅子の部屋

大阪市 村 島 秀 村

出来心でしたとまずは詫びてみる

大阪市 斎 藤 三十四

子等学校夫婦静かな昼にする

大阪市 今 井 隼 人

大学で火炎瓶つくり教えられ

ああ 弓彦君



ありし日の碑弓彦君

川村好郎

弓彦抄

歳末へ糸を垂れる別世界
 愚酔いヘルンペン向きを変えて寝る
 見栄捨ててしまえば無理のないこの世
 税務署が荷札ジロリと見て入り
 ひよつこりと手ぶらで帰つて来た無言
 ほろ酔いを待つてゐる妻の下心
 商談の横で金魚が昼寝する
 気苦労を話せば時代のずれにされ
 五寸釘どつち向いたかスツと抜け
 用心が過ぎて魅力のない若さ

再発で悪化

碑 満子

夫 信重(弓彦)こと、生前中は皆様に、
 一方ならぬ厚誼を忝のうし誠に有難く謹し
 んで御礼申し上げます。

入院以来、川村好郎先生はじめ多数の皆様
 にお見舞いいただき、色々とお励しいたいた
 甲斐もなく、こんなことになりました残念に
 存じました。一旦は殆ど回復し、この分なら句
 会に出席して皆様にお会い出来るのも間近
 と喜んでおりましたが、再発しましてからは
 急速に悪化しまして年の改まるのも待たず逝
 ってしまいました。

早くから、ガンだと云われていたのですが
 本人に知られるのを恐れる余りお見舞に來て
 下さった方々にも、ひたかくしにしておりま
 したので、それとなく別れを告げていたたく

ことも出来ず、今となつては却つて悔を残し
 ております。
 病床にありましても川柳を唯一の楽しみと
 し皆様の句作を拝見して俺もやるぞ来年から
 出直しだと始終申しておりました。
 川柳のおかげで闘病の苦しみも、多少でも
 和げられたのではないかと存じます。

伏せ字

不二田 一三夫

同人吟などの校正で、毎号伏せ字になる碑
 弓彦氏だった。碑を「いなび」と読む人は、
 ぼくの知るかぎりでは一人もいなかった。
 「雅号ぶっちゃけばなし」にご登場ねがつて
 文字の由来などを知ったが、活字と取り組む
 ぼくには、なにか親しみがもてて、本社会
 などで会うと、こちらから黙礼したものだっ
 た。

同人吟には精勤組ではなかったが、その知
 的な句にひかれていた。

本誌の最後の同人吟は、四十四年五月号だ
 った。

淋しげな音で十円玉が舞い

ありし日の添木は根元でもたれてる

スーパーの隣りの老舗吸い上げる

奥さまにおくやみの一筆を送ったら、美し
 いペン字で返信があった。胸を打たれるもの
 があり、無断でその一部を掲載させていただ
 いた。(合掌)

独 身

村上春已選

結婚費腹積りして聞く独身 大 吉
 独身を看板にしたカネ使い 青 夜
 ラーメンを大箱で買う独り者 里 風
 独身であればつかめたチヤンス 翁 童
 独身が三役占めてストにする 芳 朗
 独身は芸一筋の舞扇 富 子
 独身の辛さ互に肩を寄せ トク子
 独身の最後の夜を梯子酒 綾 女
 宿直を買っている独り者 鎮 也
 祝福をうけて去る日の独身寮 芳 子
 強がり云って独身気があせる 肖 二
 独身でおれば不具者に扱われ 祥 月
 独りもの掛声かけてぶつ放し 露 杖
 独身へ親切過ぎて噂され 綾 女
 チョンガーにも飽くと結婚の 七面山
 独身へ世話好きうるさくつきま 思 月
 独身が恋しくなつた倦怠期 弘 朗
 独身の気軽くネオンの灯を泳ぎ 七面山
 妹が来てよ 波立つ独身寮 国 彦
 独り者食えずと二人にさしたがり 軒太楼
 独身のうちが花よと云えぬ年令 公 平

気が付いた時は婚期を過ぎていた 一 郎
 諦めが重なり独身主義に馴れ 止 水
 味噌汁を恋いそは食う独り者 礎 山
 独身寮かかるところは鍵をかけ 古 方
 それ程の理想ものうて嫁きおくれ 初 甫
 独身がパン屋を起す雪の朝 隆 子
 子供抱くまで独身のようなミニ 伶 人
 独り居て甲斐性なしだと思ひ 征 山
 独身の部屋の続きの自家用車 可 住
 独身へピリオドを打つ指輪買う 佳 子
 独身に馴れて器用に針を持ち 曉 風
 独身で当分暮す御栄転 不 二
 主義あつて居る独身で無いけれど 松 花
 風邪三日独身主義にひびが入り どんたく
 独身ですかとうれいし事聞かれ 南 奉
 独身で通すと母の気をもませ 白 汀
 ハイミスと知らず失礼申し上げ 曉 明
 主に仕えまつる独身束ね髪 輝 親
 独身をまだエンジョイし親不幸 芳 朗
 早う身をかためなはれと下宿云い 春 日
 独身と云う税金を払わされ 佳 女
 佳
 独身の婦長女でないかまえ 政 夫
 だしぬけに独身ですという度胸 文 一
 ベテランと言ふ婚期をとり逃がし 正 朗
 医師独身老看護婦にからかわれ 光 道
 独身の誇りまつ赤なシャツが着れ 宵 明

独身に団欒の無い飯が煮え 代 仕 男
 独身よさらば日記をめくるまい 千 翁
 天
 道草もせずころばずにまだひとり 柳 子
 梅
 中島小石選
 校長の訓示が長い梅の鉢 宵 明
 梅林へ一枚重ね着するも年 曉 明
 ふるさととは氷とけそめ梅ひらく 角之助
 梅咲いた事も書き添え母の文 秋 女
 母のこつ青梅提げて漬けに来る 大 吉
 ビューティスボットの二輪 どんたく
 梅エキス昔の智恵へ母達者 南 奉
 梅溪を歩き疲れし春の冷え 国 彦
 盆栽の梅に手をやく祖父の留守 政 夫
 筑后川下れば梅花咲きこぼれ 道 雄
 言い過ぎた梅をいだいて梅に佇ち 鎮 也
 梅の実を庭にこぼして風が止み 佳 女
 一杯の梅酒に酔うて父は下戸 七面山
 梅開く雪をかむっている笑顔 千 翁
 この梅も用地補償の中に入れ 季 賛

このあたり梅の名所はタムの底
 梅活けた床に結納飾られる
 病床で二度目の梅の蕾を見
 熟成が待てず梅酒の封を切り
 月ヶ瀬で震えながらに梅を褒め
 スモッグは知らず白梅咲き乱れ
 先代の栄華知つて庭の梅
 盆栽の梅は咲かないまま枯らし
 梅一輪女囚も春だなど思い
 光琳の梅の太さに逆らわず
 子に送る梅干人の手を借りず
 梅林へ孤悠のゆるい歩を運び
 凜然と咲いて廃家の梅薫る
 梅一輪咲いて厨の窓かざる
 山の宿梅が旅情をなぐさめる
 梅添えて明るい春の床になり

佳 佳
 梅が咲くその平凡に目をみはり
 梅薫る女あるじの留守な部屋
 梅鉢鉢一杯の花をつけ
 売り家と知らずに咲いた梅古木
 梅干のいつまで壺にうづくまる

人 人
 梅林の酒筵の人の着ぶくれて
 天 天
 梅林の日ざしへ立つた老夫婦
 軸 軸

肖 古 素 章 輝
 二 心 身 雅 親
 郎 郎 郎 郎 郎
 正 露 露 無 古
 朗 杖 杖 閑 方

タレント

長野文庫選

老梅の春を粧う 一二輪
 タレントの不足を言えば眠ること
 サインするためタレントのペン習字
 タレントの離婚で売れる週刊誌
 タレントは色紙へ呪文のくに書き
 子のような主役にタレント臨つた
 タレントの足マスコミに引つ張る
 タレントは心にもない世辞を言い
 タレントと言われ本業留守になり
 タレントはかくし芸でも金になり
 タレントのこは演技でない地裁
 ミーハーをタレントの餌で寄せ集め
 二三べん出てタレントの顔をする
 タレントを辛い稼業と見てくれず
 タレントの人気へ切込む週刊紙
 世間騒がれタレントの道けわし
 タレントの過信がもとで人気落ち
 タレントの其後、口の端に上らぬ
 タレントも腕が揮えぬ議会劇

魚 山 勝 初 芳 章 止 文 素 翁 曉 新 不 代 芳 正 道 凡 松
 子 山 甫 朗 雅 一 風 風 助 二 仕 子 朗 雄 九 花
 塗つたまま豆タレントは寝てしま
 タレントの無表情なる楽屋裏
 タレントの本当の涙見た受賞
 タレントのようにかけ持つ忘年会
 タレントのギャラから汗を拭く
 週刊誌タレント種によく稼ぎ
 大衆を頼みタレント立候補
 タレントとじかに話せば国訛り
 パツと出てタレント人気がそれ
 多忙なるタレント自分を人ませ
 自己陶醉し出しタレント置き去
 ドスの利く声でタレントのし上
 おおかたのタレントいつか姿消
 タレントが競うテレビの浮き沈み

佳 佳
 タレントも書かれる内は脈があり
 タレントになつた噂のそれつきり
 タレントになれると親の一人ぎめ
 淡雪のようにタレント消えてゆき
 総長がタレント並に扱われ

人 人
 タレントの忘れた頃に死亡記事
 地 地
 マスコミの筆にタレントおびえ
 天 天
 怒る時さえタレントの演技臭
 軸 軸

輝 輝 保 政 輝
 親 夫 夫 夫 夫 夫
 二 二 二 二 二
 和 和 和 和 和
 久 久 久 久 久
 七 七 七 七 七
 面 面 面 面 面
 山 山 山 山 山
 ト ト ト ト ト
 ク ク ク ク ク
 子 子 子 子 子
 伶 宵 宵 宵 宵
 人 明 明 明 明
 静 明 明 明 明
 歩 明 明 明 明
 古 古 古 古 古
 方 方 方 方 方
 彦 彦 彦 彦 彦
 国 国 国 国 国
 彦 彦 彦 彦 彦
 思 思 思 思 思
 月 月 月 月 月
 緑 緑 緑 緑 緑

初歩教室

——題「静」——

本田恵二朗

楽しい句、ほのぼのと温い句、なんとなく微笑ましい句、いいお年をしていて若々しい句、品のあるユーモアの句、そんな句に出会うと後味が良い。そして人生戦争に疲れた頭のクリーニングになったり、保養になったりもする。私はそんな句を生みたい。皆んなでそんな句を生み出し合いたい。しかし、それ一辺倒であれと主張しない。

真剣に掘り下げた思索のはてに生れてくる真実味の句を求めるときもしきりである。その両面のバランスがとれてこそ、ほんとの川柳人と呼ばれるのだと思う。それだけ巾のある川柳人でなくてはなるまい。その結果が、完全なる人間形成となって現れるのだと思う。むつかしい柳論の戦いよりも、句という現物を生み出すの方が先決だ。それぞれの子孫に残すのだと思って、句を生めば、無責

任な句は生めないであろう。

さて例の如く、皆さんのご熱吟を楽しく鑑賞させて頂くことにしよう。

うち中の音まで末つ娘持つて嫁き 富子
音まで持つて嫁くとは思っていなかったが、
こゝも静かなるうとは、お気の毒さまだ。
過疎嘆く里に紅葉が燃えている 軒太楼
その嘆きを知らぬげに燃える紅葉に、句主の
感慨はそられるのだ。叙法満点である。

静寂の淵で古城跡冬に耐え 静観堂

古城跡の冬の状況が目前に浮き上ってくる。
座五の冬に耐えが適格に効いている。

静けさがわが足音をせきたてる 大吉
こうした経験たれでも持っているであろうだ
けに、共感を呼ぶ句である。

静かなる余生写怪に見つけたり 濁水
見つけたりと堂々言い切ったところにこの句
の強さがある。倅せな余生を祈りたくなる。
静けさは真夜中だけという暮し 繁子
日本の主婦の生徳の一面を浮き彫りした。

停年の元気が静居しておれず 雅万
健康は宝だよ。静居など羨望えだ。頑張れ。
動中に静あり上手に船を漕ぎ 為二

活動家は寸暇を利用して睡を取る術を知ってる
独り寝の旅愁をそそる雪の音 弘生
雪の降る音があるうはずがないのだが、その

音を聞くほどの静けさを感じるのは詩情だ。
富士の五湖波を忘れて冬眠す 志津

冬の富士五湖の姿を、句主の感覚は、かくの
如く感じ取った。川柳する者の倅せだよ。

停電の一瞬音もともに消え 生仏

不意打ちの停電の時の感覚をよくとらえた。

音が無いだから心がおお乱れ 凡九郎
静かなら心の乱れがなごみそうなものなのになお乱れがつる。それが感情の動物だ。

煮えつまる迄を静かに時稼ぐ 政夫
政治家などこの手をおぼえたとベテランだ。

雨垂れの音を数えて山の宿 露杖

山の宿の静寂が余すところなく描写できた。
わくら葉の散り敷く庭のひそという 茂美

座五のひそというで句が生きたよ。
静かなる抵抗妻のただ黙し 三十四
この抵抗法には、かなわんな。同情する
よ。

玉砂利を踏む静けさの清く澄む 行有
清く澄んだ静けさ、神域なればこそだ。
叱られる言葉が痛いほど静か 克枝
身にしむ言葉、有難い忠言、それは静かに痛
く、また甘く、心にしみ込んでくる。

喧騒のあすへ静かにお茶をたて 一二三
あすも、あさっても、生きるための喧騒に身
を投じなければならぬが、茶を立てるとい
う心のゆとりは尊い。かくあらねばならぬ。

老妻の試歩へ静かに雲流れ 東雲楼

二人で眺める雲の流れに、斗病に勝った感慨
が乗っている。先妻をいたわる姿が浮ぶよ。

山寺の一夜松籟と対話する

夜孝

松吹く風と何を語り合うのか、诗情豊かだ。

斧の音山の静かへ楽譜かく

近江

山の静けさはリズムミカルに聞える斧の音を、
あたかも楽譜を書いていると聞く耳が尊い。

騒音に慣れ静けさに落着けず

和風

感性というものは妙なものだ。

春夏秋冬ヤングパワーに静がない

八郎

若い力、若いエネルギー、それでよいのだ。

冷静になつて未練を見つけない

利美

痴話喧嘩なんてこんなものだよ。

附添いの寝息聞いている夜が長い

千代

病床に眠れぬ夜の情景や感情が描写された。

いたずらな鯉が静けさ跳ね破り

誓二

鯉としてみれば、別にいたずらをしたわけではなからうが、静かなだけに句主の軽い吃驚

り振りが、面白く想像されるよ。

静寂の隅から喝咽波となる

光道

波紋のように広がる喝咽、悲しい静けさだ。

日曜の数室無気味におし黙り

綾女

日頃のにぎやかさに比べて、全く同感だよ。

チャルメラがしじま破つて寒く更け

隼人

寒い冬の夜を作るチャルメラの哀調よ。

寝静まる宿の枕へ老を知る

進

寝つきの悪くなった我が身をかこつ声だ。

静を引き裂くように雉の声

止水

雉の声はとがっている。冴えている。それだ

けに静寂を引き裂く如くに聞える。

服部十九平遺句集

十 九 平 柳 樽

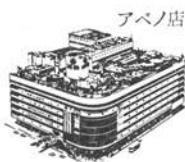
送料共 530円

川柳塔社で取次します。

お買物は

豊かな生活にご奉仕する

近鉄百貨店へ――



アベノ店



上本町店



アベノ店 621-1231 / 上本町店 779-1231

スト要結静かに今日の陽がのぼる 比呂路
昨日までの深酷な戦が嘘のようである。静かにのぼる陽の色は、平和の色である。
台風一過けろりとないだ海の貌 秀村
あれほど荒れた台風め、知らぬ貌でのたりのたりと波がゆれている。けろりとはこのことであろう。
實果たし静かな里にいる余生 多幸
余生というものは、静かで平和なるを最とす
おてんばと見え静かに茶をたてる 静子
動と静との両面があつてこそ好ましいよ。
倅せを心静かに噛みしめる 満津子
噛みしめると言うに言われぬ味があるのが倅せというものだよ。

勉強部屋静かに更ける入試前 万
ジェット音夜のしじまを突き破り 子
独り居の心静かに茶をたてる 頼
手待つ父へ音無く時が過ぎ 次
大物の静養世論からのがれ 勝
音絶えし夜空に無気味通天閣 一
シーンとして聞く説教へ欠伸噛む 平
静けさにふと午前様酔いが醒め 新之助
爺ちゃん静かにしてよと勉強部屋となる 登

題「花」二月二十日夕切（四月発表）
倉敷市下津井三五二 千七七一
本田恵二郎 宛

大 萬 川 柳

「脈」

入選発表

大 阪 小松園
脈ありとみたか現金ちらつかせ
羽曳野 吐 来
脈のあるしるかそつと囁かれ
大 阪 形 水
本筋をそらして脈を探り合い
小 松 芳 朗
出座へ医者のおんぴり脈を診る
美 彌 弘 道
善人の脈を乱した小さき嘘
大 阪 儀 一
仲人はどちらの脈も腫ではかり
頭 唄 茂 美
コメカミをながめ頭を下げつつけ
大 阪 大 吉
まだ脈があるので喪服入れたまま
大 阪 保 夫
まだ脈があるからクビにもされず
大 阪 慶之助
雑談と見せて気心探つてみ
鳥 取 日 満
まだ脈はあると思うと妻の感
倉 敷 春 日

選 者 清 水 白 柳
投句総数 六 百 六 十 句
入 選 九 十 句
脈とらせながらも鍼医だと思ひ
堺 一 二 三
もう一度脈を試してみる未練
堺 草 春
脈搏を孫にきいてる日和ぼこ
堺 素 郎
寝静まるころ人形の白い脈
八 尾 鬼 遊
一席を催ける脈のある話
鹿見島 トク子
まだ脈の ~~もも~~ 見合いに駄目を押し
下 関 不 水
まだ脈があるよと補欠いたわれ
藤井寺 吸 江
脈とる間ナースのホクロ数えあげ
大 阪 野迷路
脈切れてアツと驚く貸した金
鳥 取 秋 女
友の計のしきりわが脈たしかめる
大 田 軒太楼
脈ありとみてへそくりも掻き集め
大 阪 文 秋
脈強く打ち愛告げる邪魔をする

鳥 根 正 朗
始めから脈がないのに通いつめ
大 阪 阿 茶
脈のある間に名義書きかえる
岡 山 敬 一
まだ脈はあると見抜いている家裁
大 阪 弘 生
満員車脈感じ合う好き同士
松 江 通 児
脈無しとみたかセールスしまいか
倉 敷 恵 二 朗
脈があるときみたか仲人腰をすえ
小 松 弘 美
脈をとる医師を開んで息をつめ
大 阪 新之助
鍼脈があるのに閉山してしまひ
天 理 義 一
脈のない陳情もむげに断れず
大 阪 旅 風
脈をとるナース声まで青江美奈
富田林 花 梢
先生に握られてから早い脈
倉 敷 扇 水
打ち明けてから正常の脈となる
大 洲 眺 明
脈のない話へ必死にしがみつki
岡 山 康 明
脈のある眼だ口ほどにものを云い
豊 岡 和 久
脈までがある美人に手をとられ
鳥 取 礎 山

風呂場にも脈を氣にした妻の声
平 田 代 仕 男
陳情団脈ありそうで食い下り
富田林 きはち
脈の無い恋へ手相をじつとみる
大 阪 痴 亭
脈の無い相手はお茶であしらわれ
高 石 好 郎
大丈夫貸付歳暮も受け取つた
岸和田 きさ子
銀行の診断動脈硬化症
脈ありそうでハンドル軽うなり
脈無しとみたか電話もあれつ切り
八 代 史 朗
脈があるうちに聞きたい顔ばかり
打診するつもりが先に酔いつぶれ
堺 青 香



脈があるから叱るのに反発し
脈ありとみた仲人が眼で知らせ

大阪 小路

間に合つたバスへ急いだ脈となり
寝もやらずまさかの脈に触れたま

松原 史好

止りかけた脈が話題になる術後
脈がありそう彼女振り向いた

兵庫 可住

消えんとする脈母が呼びもどし
年賀状脈のないのを切り捨てる

羽野 幽玄

脈躍るだけのデートでまた別れ
まだ脈があるぞと理性くすぐられ

宝塚 ゆきき

あきらめなはれ脈おまへんと返事
どなたにも脈ありそうマダム眼

倉敷 千翁

まだ脈があるとは男だけが云い
まだ脈がある手土産が重なり

倉敷 里風

脈ありそうで無さそうな待ちぼう
まだ脈がありそう煙草に火をつ

尼崎 利美

先は右で返事までと脈がなし
両方にまだ脈があり別居中

西宮 百酒

お愛想に脈あるように云うておき
脈なしと悟つて話題変えてゆき

今治 宵明

山脈の北に育つて貧に慣れ

脈搏が枕に伝う夜の悔い

高槻 静馬

神妙な顔でママゴト脈をとり
脈々とどんぐりならぶわが家系

堺 天笑

山脈が見えて船脚もどかしく
復縁をせまれば女茶も飲まず

堺 天笑

追伸のたつた一行に残る脈
拗ねてもみ泣いてもみたが脈が

米子 千代

遠い日の言葉が胸で脈を打つ
暮情脈打つて夜汽車を眠らせず

大阪 水客

体温が残りあきらめきれぬ脈
動脈硬化か正論が通らない

大阪 水客

脈のある話にしとく旅帰り
木の葉の欲求不満葉脈が透と見え

佳句

わが脈の静かなるとき湯のたぎる
もう一度ひとりになつて脈をみる

大阪 公平

脈ありとみれば銀行夜も来る
脈の位置あつたあつたと妻達者

小松 魚山

それからは拒否反応の疼く脈
人ノ句 倉敷 扇水

更生の脈ありと茶をすすめ

地ノ句

父ちゃんに云えと自動車脈があり

天ノ句

更年期やがなと脈も診てくれず

堺 素郎

曾祖父の血脈が知らお人好し

昭和四十五年度

ベストテン (一月現在)

一 素郎

二 日満

三 属水

四 水客

五 千代

六 天笑

七 静馬

八 吸江

九 宵明

十 百酒

十一 利美

十二 里風

十三 千翁

十四 ゆきを

十五 幽玄

十六 可住

十七 史好

十八 小路

十九 青香

二十 史朗

二一 好子

二二 山郎

二三 魚山

二四 芳仙

二五 笑風

二六 公平

以下略

昭和四十五年第三回

「モデル」

五句以内

締切 二月二十日

第四回

「急行」

五句以内

締切 三月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五十六

郵便番号 五九二

川村好郎

第十七回 大萬川柳大会

日時 二月二十二日十二時半
会場 割烹 大萬

(詳細は一月号川柳塔誌上をご覧下さい)

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生はお元気で十二月の末に「本年もあますところわずかとないいよす。川柳日記一月の句は一月末にならなければ出ませんのので二月初めにお送りすることとなりますので三月か四月頃に発表して戴くことと存じます。『時いそがぬ旅がいつまで続くやら 霞乃』のお便りを頂戴した。

▼生々庵主幹と白柳編集長は一月七日、和歌山短詩型文学クラブへ出席。
▼川柳しのの「第二回誌上川柳親睦の集い」の兼題は老人・うわの空・祖国・これからの国鉄・雪国・各題二句別紙に記載、投句料不要(発表誌希望は六十一円同封のこと)二月末日までに松本市大手三の五の十三しなの川柳社「親睦の集い」宛送付のこと。

▼豊富川柳社創立記念兼宗谷夏季川柳大会は六月七日(日)正午から北海道天塩郡豊富町温泉町菅元湯館大広間で開催。兼題は「発展・元談・錯覚・歓迎(各題三句、三選者共選)」。投句は二百円封入の上、五月二日までに、北海道天塩郡豊富町東二の五、藤谷怠民愚方豊富川柳社宛。
▼川柳文学社(西宮市)発行の「川柳文学」誌は昭和四十四年十二月一日発行の十二月号で百五十号を迎えた。堀口塊人主幹執筆の塊人帳や編集後記「ぼおとのおと」の味は定評がある。
▼川柳番傘十二月号は、巻頭作品採集を特集、新年号には恒例の秀吟年句会が十二月十四日横山一声居で開催。
▼第十六回岡鉄倶楽部文化部川柳大会は十二月十三日

―岡鉄クラブで開催、ともに寄せ書を頂戴した。
▼若本多志副理事長は旧ろう三十日から一月三日まで九州国東半島、臼杵市周辺の石仏巡礼。八日、九日は上京のため本社句会欠席。天平の慈顔そのまま臼杵石仏―多久志。
▼久留米市民川柳会、川柳孔雀誌は十二月号をもって五十号となった。市制八十周年記念川柳大会(十一月二十三日開催)の入選句記念座談会を掲載、また、五十号記念自選句(十句五十人)を一月号より掲載の予定と発表。
▼川柳ジャーナル十二月号は一九九年度自選作品集を特集、七十人の作家が七句ずつの作品を発表している。
▼北海道芸芸年鑑昭和四十四年版が発行された。北海道全川柳人の秀句が網羅してある。定価五百円送料七十五円、申込みは小樽市花柳社三丁目二十の八、小樽川柳社。
▼三重川柳協会発行の川柳三重十二月号は大会特集号として昭和四十四年十二月十日発行。二年連続知事賞を受賞した小松原爽介氏

(西宮市)の句―離農した足に四季なきアスファルト
▼川柳人(東京柳樟寺川柳会発行)四百五十三号に住吟散歩が掲載され、高木夢吟郎氏が全国柳誌から選出されている。川柳塔十一月号からは
―内輪からもれた噂でねじ込まれ 生々庵
―熱帯魚造花の神のいたずらか 水車
―水々の叫び今なお 霊眼子
が抜粋された。
▼第二十一回大阪文化祭川柳大会作品集が発刊された。
▼昭和四十四年度の平安賞は見送り受賞者なしと決定になった。
▼昭和四十四年度ますますかつと賞の黄薇賞は長藤泰敏氏(福知山市)が「正月の帽子が古くよく似合い」の句などで、百花賞は片岡も子子さん(総社市)が「菊咲いた土塀に叱る祖父がなるい」などの句でそれぞれ受賞、活動賞は中永智遊氏(岡山県)「グルーブ賞は川柳七草会(代表者木村三々郎氏)岡山県邑八町」が受賞になった。
▼柳都川柳社(新津市)発

美しい心

美しい花

富田林 公栄社(07212) 2064

後藤梅志氏急逝

一月二日大阪大手前病院へ入院。一月十五日急逝された。十七日自宅で告別式。

締切り、⑥四百字詰原稿用紙を使用すること、⑦宛名は大阪市東区南町二の二四橋本言也、⑧所属川柳社の住所、主幹名、月刊、季刊など添記すること。

▼水粉千鶴主宰編集の川柳道場七十号は道場牌総選者傑作発表号として発刊された。三十八題を三十八人の会員がそれぞれ選を担当秀句を選出した。集句五千三百九十六句、入選句五百三十二句。成績は一位、桑野林鶴、二位、桑野澄子、三位、難波しのぶの諸氏となり、輝く記念牌は桑野林鶴、澄子夫妻が獲得された。

▼工都年刊句集一九六九年版が昭和四十四年十二月二十五日尼崎市昭和南通八の二二、大石石尾方から発行された。定価二百円。四十一人の句が収録されている。本社同人の小島蘭幸氏も参加され、若々しい句が揃えられている。

――身よりはるがずした時計はすでに他人の刻 英子

酒よ酒儀をころっと変えとくれ 蘭幸

▼東都川柳作家連合会創立二十周年記念、東都川柳大会は一月十五日午前十一時から、東京都渋谷区立渋谷図書館階上で開催。

▼山上千太郎氏（小松市）の「酒うまし」の句と柳画の扇額が、新築の須天町公民館の階上床の間に掲げられ好評を得ている。

▼八木千代さん（米子市同人）から、「林瑞枝さんに大万川柳の大会に出席しよう」と誘われています。と川村好郎氏をはじめ在阪の柳人をお揃いでご出席をお待ち申し上げています。

▼堀江芳子さん（鳥根県）から、「十二月八日にはうちでもまた戦争の話でした。毎朝義眼を入れてあげる度毎に、やはり戦争を身にしみて思います。成長した長男、二男を見て、この子らにこんなことは沢山だと見えない者のみじめさを悔む正朗さん」と話します。

▼和草春氏（堺市同人）の住居番号が左の通り変更になった。堺市熊野町西一丁一番二十三号。

▼同人譚弓彦氏は癌のため

療養中のところ、十二月十三日逝去、四十才。遺族は未亡人と幼稚園に通う女児生後三カ月の女児で、お梅も申し上げる言葉もありません。

▼山田季賛氏（高槻市同人）は万博関連工事が完成して今年には山陽新幹線工事最盛期となりそうで正月休みを返上、用地収集と工事その他の打合せ会議で頭張っておられる。一月八日は、北川春果氏の転宅手伝いの後、本社新春句会に出席された。

▼住田乱耽氏母堂が十二月十六日午前二時永眠された。九十三才、葬儀は十七日午後一時から神戸市東灘区横屋の誠商會館で営まれ、近江砂人、堀口塊人、増井近二也、伊藤入仙の諸氏と薫風がお見送りをした。

▼作法叢書「川柳の作り方」に近江砂人著が東京都千代田区神田錦町一の六明治書院から発行になった。著者の鑑賞を通しての解説や選后感などの貴重な積み重ねが、初心者に親身に溶け込んでいる川柳を納得させることが出来る好個の入門書となった。定価四百八十円。

▼吉岡美房氏（大阪同人）はこのほど大阪府泉佐野警察署の警備課長になられた。

▼石坂新雪氏（米子同人）は昨年長男の就職、国政モニター、会社の大合理化問題等で作句から遠ざかったが、本年はやる気だ、力強い書信があった。

▼津田麦太様氏（元不朽洞会員）は昨年十月二十三日に逝去された。浜田久米雄氏からの書信ではご遺族の方から一月六日に知らされたのだそうである。

▼井上吉次郎氏（大阪追手門学院大学部社会学研究室）から一月号の「ゆーもあ特集」はよい読み物だったと。

▼菊沢小松園氏（大阪同人）は一月三日伊丹から室路北海道へ人間のくらしの智慧のたくましさと句信。

▼若柳潮花氏（高槻劇場）は二月十一日に三越劇場で友情出演をされる。長唄、外記猿。

▼八木摩太郎氏（堺市同人）はNHKテレビ「ふるさと」の歌まつりにゲストとして出演、宮田輝アナと対談された。二月十二日午後八時から、再放送は二月十四日午後四時である。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
タケタ薬品



アリナミンA

（同人）は和歌山市和歌浦九〇番地一三の新居へ移られた。

▼太田良子さん（大阪同人）は昨年三月夫君とヨーロッパ旅行をされたが、もう一度行つてみたいと述懐されている。

▼不二田一三夫氏執筆のラジオ大阪「奥様コーナー」は本年から月曜・火曜日に変更。なお新関西新聞「ぶれ」読本」を六日間、二月の第二週に連載予定。

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

過密都市深夜へ生活つながせる
不意の客そそくさ冷戦中を去り
どの顔も深刻吊革の十二月

北端の孫へ寒いを禁句とす（稚内の娘一家へ）
和歌山市 秋月 宏方
落葉道歩く姿の詩人めき
人生の延長戦か古希もすぎ
学歴も年もとわない職に生き

大洲市 米 沢 暁 明

参観日うっかり母の助け舟
遠慮なく手を握らせた丸木橋
景気よく飲んだ覚えの請求書

折角の苔とも知らず犬走り
応接で花に済まない煙草吸う
どの部屋もみな花があり目出たい日
今治市 長野 文庫

今治市 月 原 宵 明

手を抜いたのを天災があばき出し
くらしには触れず栄養とれと医師

枯葉一つ散歩の肩に秋です
風物詩こんな言葉の柿を干し
花終えて一年草は引きぬかれ
小松市 山上 千太郎

本社新春句会

会場 以和貴荘

八日 午後六時

そここに新年の挨拶が交わされ、さすがに新春句会らしい会場の雰囲気である。
生々庵主幹の柳話は、お得意の幼児を中心にした『考える力』の指導方法を川柳初心者

にむすびつけたもので、むずかしい問題は集団で考え、解決にあたるなど、これも柳社にむすびつき、われわれも考えねばならぬことであった。
本年から最後の選の天位が月間賞となり、御題に因む「花」で水客氏が獲得された。
短冊交換会もなごやかに、四十四年度の永久保持杯は二年連続の藤岡花梢さん。全出席は十七年連続の傍島静馬氏を筆頭に、与呂志一三夫・綾女・天笑・花梢・生々庵・形水・鬼遊・トメ子・金三・白柳・いさむ・一舟・大吉・つき子・鶴声・儀一・肖二・万的・庸佑諸氏（前月号の失名三句は垂水葵水氏）

出席 与呂志・一三夫・双葉・大吉・維久子・肖二・綾女・文秋・野迷路・柳志・作二郎・千万子・圭井堂・静馬・柳宏子・太路・古方・形水・一舟・新之助・花梢・瓢太・水客・滋雀・葛城・鶴声・勝晴・貞山・薰風・冬二・生々庵・好郎・凡九郎・儀一・金三・つき子・いさむ・栞・千梢・静夢・天樹・摩太郎・誓二・宣介・白柳・天笑・一扇・万的・季賛・清人・トメ子・鬼遊・六龍子・小路・恒明・酔々・虎声・慶之助・静歩・一二三・弥生・良子・凡吉・あいき・葉子。

（河井庸佑整理）

席題「吠える」

伊東静夢選

吠える事だけが自慢の犬を連れ
結構な御身分吠えるのを忘れ
吠えたての直進熊はふりむかず
遠吠えに似たゲバルトへ政治鉞ゆ
百獣の王一吠えに叶うなし
サボータージュ遠吠を似て隅に居る
反戦論吠えて思想は崩されず
吠えるだけ吠えてあつぱれ落選し
どうかななるさ怒濤と共に吠え
夢を摸索している犬の遠吠え
朝刊の代打少年吠えつかれ
スピッツに貴族の声で吠えられる
吠える犬鎖の長さだけの虚勢
セイルスのフアイトへ妥協して吠も
風吠える海に篝火たく遭難
サングラス隣りの犬に吠えられる
吠えたての犬は垣根の向う側
悪酔いを送って行って吠えつかれ
敗北のしっぽへ吠える冬の天
あたらしき神話の雲に吠える犬
壁面に挑む女が吠えている鏡
海吠える暗さへ蟹の身がしまり
事成らず薄むらさきの雲に吠える
忠実に吠えて番犬叱られる
演壇は吠えばくはおんなのおもう
吠えることなき一兵の屍を埋め行く
寒天の星へコリーの吠えるだけ
遠吠えを男笑っているばかり
後姿へ吠えるものがない空つ風

与呂志
良子
天樹
一三夫
野迷路
白柳
金三
生々庵
千梢
宣介
小路
鬼遊
あいき
新之助
天樹
鶴声
千万子
形水
天樹
作二郎
作二郎
水客
宣介
葛城
冬二
作二郎
静歩
生々庵
静歩
静歩

席題「梯子酒」

海士天樹選

吠えるだけ吠え恐わがりの犬になる
潮騒を吠えると聞いて逃避行
末つ子が玄関を背に吠えている
忠実な犬に善人吠えられる
断絶のあせり心で吠えてみよ
青年のゆめに木馬が吠えはじめ
やせ犬が吠えて三日月あるばかり

水客
白柳
一局
鬼遊
虎声
冬二
静夢

酔さめてはじめに思う梯子酒
梯子酒こんどは僕の顔が利き
ころあい子に迎えさす梯子酒
人生の弧独に耐えずのみあるき
手洗いの鏡が見える梯子酒
梯子酒星に嬉しいことがある
梯子酒孤独をかばう楯とする
交番でやっとなつと止たはし
政府が何んだサツが何んだと梯子酒
胃袋でカクテルになる梯子酒
今頃は三々九度かはし
おんなからさそわれている梯子酒
はしご酒すでに己を見失う
つり銭はきつちりもう梯子酒
出し渋るおんなにからむ梯子酒
酔うての偶話のこる梯子酒
ネオン皆俺の味方の梯子酒
陸橋は天下の嶮の梯子酒
地下足袋で明日考えぬ梯子酒
愚痴聞いて呉れる友あり梯子酒
終電で区切りがついた梯子酒

花梢
古方
あいき
一二三
白柳
作二郎
六竜子
好郎
摩太郎
新之助
好郎
冬二
六竜子
千梢
貞山
静夢
生々庵
薫風
金三
醉々
新之助

兼題「ベル」

西尾

栗選

梯子酒に胸の釦を見うしなう
どこやらで会うて別れた梯子酒
梯子酒野心の方が酔いつぶれ
猫が虎虎が泣いている梯子酒
梯子酒わが家がだんだん遠去り
薬飲むのも忘れてしまった梯子酒
女性上位のうっぶんを持つ梯子酒
梯子酒とわかり中途で撒かれてる
梯子酒けっきよくひとりきりになる
乾杯がまだ続いてる梯子酒
妻あわれ梯子酒と信じてい
梯子酒出発点にたどりつき
童話がほしくなった男の梯子酒
梯子酒売れぬ詩稿が泣いていた
系図逆さまにして梯子酒に浸る
憂さひとつひとつ置いて行く梯子酒
梯子酒哀しいことがまだ消えず

静夢
柳志
清人
醉々
新之助
柳宏子
文秋
葛城
花梢
一三夫
栗人
清人
冬二
一三夫
静歩
一二三
天樹

マージャンの誘い土曜の午後のベル
分校のベルに鶏走り出し
自転車ベルでは街の子は除けず
眼ざましベルお前は正直すべ
もう会えぬそんな気がする発車ベル
もう一度姿勢正してベルを押し
ベルの音さえ規格通りの2DK
叱られにきました怖いベルを押し
出かかったとこでクイズのベル鳴
定退へベルはおんなじ音でなり
ベルが鳴る前に動悸が知っていた

正朗
旅風
章雅
阿茶
芳人
清人
万人的
勝晴
清人
一舟
葵水

餅つきのキネ一振りに歳を知り 与呂志

金とひまない再会で立話し一舟

恒 静 生 綾 文 小 摩 つ 太 万 天 水 新 水 花 小 万 弥 阿 旅 芳 扇
明 步 々 庵 女 秋 路 郎 子 路 的 笑 客 之 助 客 梢 路 的 生 茶 風 子 水



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会 金井文秋報

六十の父が頑張る故郷があり 滋 雀
 本当の大事はそと胸に秘め 柳 宏子
 頑張ってきたのに手形かと叱り 好 郎
 乗り替えに三分という予定表 白 柳
 体調を人間ドックで見る余裕 金 三
 無い袖は振れず予定を変えさされ 一 舟
 頑張ってねえと送って一寝入り 小 松園
 予定外予算の中で三味も呼び 小 路
 予定地にきまる噂で地価上り 文 秋
 大事でもないのに老人しまい込み 双 葉
 ジャンケンに紅葉のような掌の相手 儀 一
 耐一杯あした頑張るエネルギー 大 吉
 頑張りなさいとパチンコ屋で別れ 頂 留子
 女神今日悪魔に見えて恋終る あ い き
 負けてから体の不調口にする 形 水
 体調がだんだん気になる四十過ぎ 誓 二
 年上を娶り大事にして貰い 喜 風
 従いて行く旅に体調整える 新 之助
 体調に合わせた晩酌もの足らず 君 子
 ジャンケンで納得出来ぬ幼な顔 智 子

打ち明けられた大事をもてあます 綾 女
 ジャンケンでやっとなつた旅行先 好 一
 予定表だけはビッシリかかれてた 凡 九郎
 じゃんけんぼんもめにもめも若夫婦 鶴 声
 遠い日の女神と養老院で逢い 静 馬
 禁酒して身体の調子おかしなり 千 代
 体調はママの責任ミルク溶く 章 雅
 幸招く女神は天に手を延べる 肖 二
 無言の抵抗真先に席を立つ 好 郎
 ママ一人智能指数に頼り切り 小 松園
 取巻に目かくしされている過信 富 久一
 ホワイカラーきれいな囚人服に見え 柳 志
 鼻風邪に三つ子のように手がかり 儀 一
 福白髪などと言われて抜けもせず 君 子
 四五本のうちは鏡とにらめっこ 千 万子
 姑の抵抗茶漬だけの箸 花 梢
 白髪染めても夫の無関心 新 之助
 本心を見抜いても一線引く微笑 あ い き
 純真な瞳に見抜かれそうな嘘 滋 雀
 能弁の策を見抜いた目が笑い 文 秋
 首脳部は折れ合う線を見抜いてい 形 水
 子の知恵はうごの暮しをもう見抜き 誓 二
 腹芸で互いに見抜かれまいとする 庸 佑
 とりどりのテープで案山子の役つも 一 舟
 豆一つ象大げさに鼻を上げ 大 吉
 カラーの迫力前衛の前に付つ 白 柳
 母なれば娘の恋見抜く勘を持ち 綾 女
 切花になつてもバラの自己過信 智 子
 大げさに云うから心のぞかれる 凡 九郎
 そうかないなそうかないと過信せし 古 方
 大げさな笑い寝かした児を起こせ 鶴 声

過信した手腕若さに追い抜かれ 肖 二
 背信の底を見抜いた日のなげき 金 三
 ママさんが白髪抜いてる暇な店 千 枝
 立志伝一筋通っているカラー 瑞 枝
 秀才に母の過信が堪えられず 葵 水
 酷使した胃をカラーにて裁かれる 章 雅
 カラージュ男の下着にまで及び 静 馬
 借金を見抜いてしんどい話する 千 代
 二度までの誤診に医者を変えず 虎 城
 せめてもの抵抗ふりむかないでいる 野 迷路
 葬儀場敷医過信がささやかれ 弓 彦
 ドヤ街でカラーテレビを見たシヨック 双 葉
 神仏の過信が医薬うけつけず 喜 風
 値下りを楯に待たせるカラーテレビ 西 出栄報
 玉造川柳会(大阪市)

椅子席の一とこ栗の皮ばかり 白 柳
 防衛の限界を知る栗のいが 富 久一
 実を抱いた栗面白く床に活け 肖 二
 栗のよう世間へトゲを見せて住み 鬼 遊
 鍵よりもキーホルダーを大事がり 千 里
 若者を鍛えホルダー譲る日を 正 朗
 ホルダーを探し禁煙思い出し 葵 水
 記録保持自分へ挑む日が続く 芳 子
 共稼ぎキーホルダーも一緒です 一 舟
 キーホルダーアパートの鍵一つ 凡 九郎
 記録破りの寒波町医者を賑わせる あ い き
 子の記録くり返し見て一周忌 竹 青
 二十五米はじめて泳いだ子の笑顔 弘 生
 斗病ヘカルテ歩厚くなってくる 一 栄
 好記録ライバル其れの上を行く 句 念坊
 一日が惜しいと思う日記書く 滋 雀

育児手帳母の苦勞がしのばれる
育児にも母の記録が役に立ち
過去帳へ香華の匂う先祖様
この記録本番ならと口惜しが
新記録期待されてる気の重さ
物忘れする年になりメモたより
懐しい記録となった子の日記
お見合の記録自慢にはならず
憧れた東京裏道歩いてた
憧れて入社長いものに巻かれ
優勝の実感一夜が明けた朝
憧れが同じ職場を選ばせる
それも青春尼さんに憧れる

展示会新製品へ眼をあつめ
見るだけで結構疲れた展示会
書道展達筆はめて読めぬま
ぜいたくな場所を使った展示会
展示会我執の彩がきらびやか
改選の度に御期待強いられる
下宿まで親の期待がきまとい
子等巣立ち親の期待に遠く居る
期待され背のびすぎた日の疲れ
子に期待出来ぬ時代の曲り角

浅間しく若しやと紙屑蹴って見る
与野党の期待が違う人づくり
期待はすまいランドセルの重さ
期待して居たと云ったら嘘になる
相好を崩して「期待してなんだ」
求人難がさせているだけの期待
わる酔でまさかと思う事を云い
どう見てもまさかと思ったのが男
ふだんが大事な時に来てるが
シヨック死へまさかと思う人だかり
まさかとは思ふお腹に指を繰り
マア本当人の心を読みかねた
うすのろにまさかと思う女出来
スキヤンダルまゝとするずる読み耽り
産みの母だからまさかを連発し
左足たつた一歩で月汚れ
沖縄も還らずなんぞ月旅行
資本家よ月へホテルを建て給え
月旅行我れ閑せずと月は澄み
月旅行子供は夢でない瞳
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報
土ぼこり汗で拭って屋台酒
喰えるまでたどった道を他人知らず
喰いつめた子へ故郷は遠い道

利食いして風鈴の音に昼寝する
よくもまあビルが並んだあの焦土
一掬の土で盆栽足るを知り
粋な月二つの影を土に染め
食ひ初めの孫が主役の祝い膳
妻の味はほめるほどには食ひもせず
土遊び余念なき顔夢の塔
土に生き我一筋に稲を刈り
マンションの暮しはよいが土ほしい
土に生き萌芽の喜びに教え
土を掘る男は故郷に妻子あり
腹一杯食ったテッチリ夢だった
せめてもの友情見ぬ振りを
土の愛信じて秋の草が延び
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報
好きやとは云わずハンカチ洗ったげ
よっぱどの事か内気の高い声
新調をいやがる子に親の見栄
過去踏み消して新調の靴がゆく
内気だが子にはきびしい母であり
一言もよう喋らずに会終る
叩き売り買うタイミンクへ声は出す
内気でも娘心はミニをはき
折角のチャンスを内気貝になり

寒中 お見舞い

王造川柳会(大阪市)
時 二月十日(火)午後六時
題 「人形」「育て」「特別
宿題「早春」
所 玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

堺・若芽合同川柳会
時 二月十三日(金) 六時
題 石嶮・たち場・力
所 八木摩太郎居

南海川柳会
時 二月十九日 午後六時
題 万国博・郵便番号・他人
所 ナンバ高架下
親和クラブ

南大阪川柳会
時 二月二十日(金) 午後
六時
題 円満・味方・臆病・箱庭
所 松崎町二丁目以和貴荘

親ゆずりの頑固が親と妥協せず
俺の子だそつかしのまで似とり
収穫の秋へゆつくり爪を切り
スイッチへさわる明治の手がふるえ
スイロー社（ハワイ）
味はどうと問われてまずいとも言
姑に味をきくのも嫁の知恵
栄養士の嫁に明治の母があり
新妻の腕前見せる味の素
味気ない返事只今化粧中
いたずらつ子走ると言えは走り
親不幸無断家出の走り書
暴走よ地獄の門へまっしぐら
走る子へ落葉も混じる秋の暮れ
あくせくと六十十年を走馬燈
川柳大阪（大阪市）
東大への道ゲバ棒にさえざられ

秋
月
清
春
久
米
雄
伊
久
野
林
明
香
報
カ
ロ
ラ
紅
花
紅
藻
浮
草
紅
茶
魔
花
蘭
泉
水
樺
山
峯
丹
丸
暁
蒼
蛇
樓
三
十
四

点と線結んで尊広げられ喜酔

東の間の生へ非情な虫のかご 本蔭棒

妻と云うつかい棒があつて生き我勝

相手にはされず人様悪く云い 茶々坊

若返るコツを先輩に教えられ 季 賛

改札口走って通り又歩き 秀峰

妻とデート男としては無策すぎ 継之助

一服がうまい平和で我が家無事洛醉

金に縁ないので達者と自慢する鉄舟

大臣を君づけで呼ぶ地元ボス 凡々

坪十万円百姓の顔でなし一乃字

クレーターも避けて足跡見せつける 正 則

若返ると云う美容体操を妻もまたやなぎ

待たされる日傘ダイヤ表を睨んでる 幸晴

— 62 —

炎天へ雲一つなし遠い道 笑風
女或る日若返つて儲かるアテがあり ひろし
ぶら下るへちまの蒼へ風の私語 誓二
娘みな親父を毛嫌いでしまひ 与呂志
こまつ柳壇（小松市） 山上千太郎報

口約が一つも成らず改選期 弘実
先輩へ折目忘れた新社員 富美子
内輪もめ恥が子の口からもめる 香徑
合せ鏡三面鏡でまだ足りぬ 吉枝
どうにも低い鏡の鼻をつまんどぎ 人生
姫鏡小さな恋をひとつ秘め 路也
飽きもせぬ鏡の顔へお早ようさん 信子
指切りをした児は安心して眠り 魚山
指切りの手へ結婚指輪はめ たつ路
タクシーが来たので鏡から離れ 芳朗
金銭に関する約束まったなし 迷流
約束がまだ果せずに街の隅 城南
先輩の愚痴をきかされ払わさ 千太郎
先輩はせんばい俺はおれの道 茶仏

栗のイガむく手にとげの秋深し 岸南柳報
栗飯になるそれ迄のひと苦勞 榎太郎
甘栗の袋大きな方を選び 規一朗
手応えのあったデートの電話くる みよ
手応えは判らずマツチ置いて去に 柳信
テープ切れて手応えをなつかしむ 白柳
手応えが逢う度毎に金とられ 南柳
ウインクへ手応えありと外で待ち 語郎
セールの愛想へ手応えない返事 育郎
手応えがあつたか妻の薄化粧 小園
焼栗にふとよぎりたる幼き日 潔路

手応えは女電灯消しに立つ 小松園
手応えのないので義理をからませる 弥栄子
そつと手を握ればにぎり返される 恭太
手応えがあつて待つ身の長いこと はやを
城北朗朗句会 川口弘生報

肩揉んでもろても近頃涙が出 ひさ絵
肩凝らし人形作りは苦にならず 富士
肩車なつかし父の背を流す 雅士
内風呂のおかけで妻の肩も揉み 生万
買出しのタク今もある両の肩 志津
心配な顔は肩から尋ねられ 為二
肩の荷がおりりや体も役立たず 芳
肩のこぶ築いた財の置土産 多幸
いさかいに娘は母の肩を持ち 一休
ランドセルで通つた友と梯子酒 弘生
お祭りに勇む子供を肩車 行有
肩の凝り古女房はツボを知り はぎの
おどけ姿社長と見えぬかくし芸 キサノ
ギヤアーと泣く裸ん坊の素晴らし芸 登
今年又糸瓜の水を取り忘れ 隼人
姿見のいらぬ程の年となり 久子
顔や姿に惚れはしません金に惚れ 与呂志

ふじかけ短詩陸会 藤本礎山報
へそくりを呉れたと見たりお年玉 美禰
酒の香にむせる年始の客絶えず 佐知子
年始客夢いっばいのポチ袋 良枝
芋判に年賀さす気の似顔ほる 勝子
年賀状下手な一句も添えておき 和宏
亡き姉の晴れ着で年賀客うける 恵子
こまで小中学生
ああそうか選挙と知つた年賀状 喜久

・寒中お見舞い・

富柳会一同

富田林市公民館内

一線を心に決めて年始に出
もう縁を切る気へ年賀出さずおく
先生の賀状へ多量の句を添える
本名の賀状はたった二三枚
来るべき一票欲しい年賀来る
病む人へ年賀の祝辞言いかねる
義理と云う二字へ年賀の三日間
年始客迎える妻が奇麗すぎ
年賀状出して年始で念を押す
年賀状臥せても父のは東で来る
墨筆へ個性が踊る年賀状
泰一 志穂 長男 舟女 久山 征山
礎鎮 征山 久山 久山 久山 久山

近著紹介

近江 砂人著

(定価四八〇円)

川柳の作り方

アイディアから完成まで

発行所 東京都千代田区神田錦町一六

明治書院

池田 あや子編

よみうり川柳 第4集

(非売品)

本著ご希望の方は川柳岡山社へ 一百円同封。

大久保和三郎著

句集「父の声」

句集ご希望の方は清水白柳氏にお問いあわせください。

四月号発表表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

自選は四句以内

近作柳樽(10句) 北川 春巢 選

九輪抄(3句) 清水 白柳 選

課題吟(各題5句以内)

「ゴルフ」 浅野 芳朗 選

「長男」 太田 良子 選

「失敗」 臼井 三林坊 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

自選は四句以内

近作柳樽(10句) 北川 春巢 選

九輪抄(3句) 清水 白柳 選

課題吟(各題5句以内)

「横道」 藤井 明朗 選

「メ」 高橋 操子 選

「男」 田垣 方大 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

本社二月梅志追悼句会

日時 二月六日(金) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

柳 話
「指切り」
「押入れ」
「妥協」
「デザイン」
席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

3月の兼題 「文才」 「白紙」 「ジレンマ」 「焼け石」

定価 百八十円(送料六円)

半年分 千 百 円(送料共)

一年分 二千百六十円(送料共)

昭和四十五年 一月二十五日印刷
昭和四十五年 二月一日発行

大阪市内南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市内南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

朝鮮人蔘の効用



二千年以上の
の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

ヒヤクは

この朝鮮人蔘の



有効成分をそっくり

カプセルにつめた

現代人の薬です

● 体力を充実させたい方

● 疲れがとれにくい方

● 貧血・冷え症の方

● 老化現象の方

● 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

朝鮮人蔘エキスを配合

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

・ペンペン草・

★こんなことを書けば年がバレてしまうが、林長二郎（長谷川一夫）の処女作時代から、映画雑誌の編集部ではたらいにいた。当時松竹系の雑誌が六、七種、日活系でも四、五種出ていて、今の週刊誌以上に食うか食われるかの激闘だった。営利雑誌だけに柳誌のようなノンビリムードではなかったが、絶対に、他誌のこたにはふれなかったものだ。目にあまるほどマズイ雑誌なら、ためえがそればいいのだから……★最近うちのことを心配してくれる人がある。改題いらい約五年、目だちらでもノホホンとしてるわけではないのだから、奇妙なことに購読者がふえ、同人もふえるで、『進め、進め』が掛け声だけになっていたのかも知れない。

★叱かれるということのは『愛情』だと思っているので、内容刷新は徐々に進めていくつもりでいる。★小むずかしい柳論があると、高級のようにサツカクする。故路郎先生がよく云われたが、あれも、これも、何十年か前に、すでに先輩が書いている。——こうなると気の小さいものは手がちぢんでしまう。★ゆーもあ特集や、はたらかうたをもうやめようか、と編集部員にはかったら、続行、続行ときた。★うちの人で、アツといわすような高級？なものなだれか書いてくれませんか。★本号から秀句鑑賞の執筆者がかわった。★本誌初代の秀句鑑賞の執筆者、後藤梅志氏が再入院、急逝された。早く句集が出来てくればいいかと祈るおもいだ。★話題をかえよう——。ぼくの知るかぎりでは、女性で、麻生霞乃先生ほど、グチャや不平を云わない方はめずらしい。えらい方だと、いつも敬服している。

★小谷葉子さんのことを書くとき後記が『受ける』のだ。とはいっておべんちゃらではないが、この人もグチャや不平を絶対云わない人である。若いのに感心させられる。★さあ二月号もすんだ。（不二田一三夫）

純良医薬



第一製薬

うちみ・肩こりに

べタンと貼るだけ！

《新型パップ剤》

パテックス



● 140mm × 100mm Ⅱ 3枚入

あなたの胃にも!



三橋達也(東宝)

アペールは、胃をイキイキ動かし、胃を健康にする新しい胃腸薬です。もたれ・食欲不振・胸やけ…など、胃の不快症状を解消します。
ぜひ、あなたもお試ください。

胃炎・胃下垂に――

アペール

(包装 36錠 / 72錠)



フジサワ薬品



アペールの力で
胃を元気にしたい

大戎
阪橋

味に輝く

北極星

TEL 06 (641) 1275 (代)



チェーンご案内

戎橋本店	味堂やわらぎ結婚式場	庄内	和堺	店
〃	やわらぎ殿	阪喜	連	店
曾根崎店		住道		店
野田阪神店		瓢箪山		店
野田阪神店別館		若江岩田		店
永楽橋店		我孫子		店
百舌鳥店				

宴会のお問合せは (641) 1275~7